論文

正しい批判はいかにあるべきか（六）

――教条主義批判を装った修正主義――

山本二三丸

まえがき
第一節　予備的注意
第二節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その一）……（以上、本誌第二十一巻第一号所載）
第三節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その二）……（以上、本誌第二十一巻第二号所載）
第四節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その三）……（以上、本誌第二十一巻第三号所載）
第五節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その四）……（以上、本誌第二十一巻第四号所載）
第六節　榊氏による修正主義批判（その一）……（以上、本誌第二十二巻第一号所載）
第七節　榊氏による修正主義批判（その二）……（以上、本号所載）
第八節　榊氏による修正主義批判（その三）
第九節　榊氏による修正主義批判（その四）
第十節　榊氏の「教条主義批判」の客観的意義

正しい批判はいかにあるべきか

むすび

第七節　榊氏による修正主義批判（その二）

一

一九六一年一〇月に開催されたソ連邦共産党第二二回大会において、フルシチョフは、『ソ連邦共産党中央委員会の活動報告』をおこない、また『ソ連邦共産党の綱領について』の報告をおこなっている。この第二二回大会は、「新しい綱領」を決定した大会として有名であるが、この「新綱領」こそは、さきに検討をこころみた『第二〇回大会報告』の中にあらわれたフルシチョフらの修正主義的主張をさらにいちだんと明確におしだし、いわば「完成された」形に仕立てあげたものである。そこで、はじめに『新綱領についてのフルシチョフ報告』[1]をとりあげ、その中に示されているきわだった主張を検討し、これによって「新綱領」自体の中味がどのようなものであるかということを的確にとらえておくことにしよう。

（1）　エヌ・エス・フルシチョフ『ソ連邦共産党の綱領について』（ロシア語版『ソ連邦共産党第二二回大会』速記録、（モスクワ、一九六二年刊行）の一四八―二五七ページ所載）

フルシチョフの『報告』は、つぎのような説明ではじめられている。

「第二〇回党大会は、ソヴェト連邦共産党の新綱領草案の起草を中央委員会に委託した。中央委員会はこの委託をはたし、綱領草案を党と国民の討議にかけたあとで、いまそれを本大会の審議に付する。われわれの大会は、共産主義の建設者の大会として、人類史上最初の共産主義社会をつくりだす偉大な綱領を審議し採択する大会として、歴史にのこるであろう。……

労働者階級とその共産党の闘争には、三つの世界史的段階がある。搾取者の支配を打倒し、プロレタリアートの独裁を樹立する

段階、社会主義の建設の段階、共産主義社会の創設の段階がそれである。

最初の二段階をわが党と国民はすでに通りすぎた。そして、党がそのいずれの段階でもつねに成功をおさめたのは、党が確実な羅針盤をもっていたこと、すなわちマルクス・レーニン主義のゆるぎない基礎の上にたつ戦闘的な革命的綱領をもっていたことによるところが多い。最初の二つの綱領は、ウラジミール・イリイッチ・レーニンが直接参加して、かれの指導のもとに作成された。第三の綱領を起草するにあたって、われわれは、つねにレーニンに指示をもとめ、レーニンの先見の明ある構想――社会主義建設と共産主義建設にかんするかれの天才的思想をよりどころとした。だから、われわれは、十分な根拠をもって、この綱領をもレーニン的綱領と呼ぶことができる。

二〇世紀は、共産主義が大勝利をおさめる世紀である。二〇世紀の前半に、われわれの住む地球上に社会主義がしっかりとうちたてられた。今世紀の後半には、そこに共産主義がきずきあげられるであろう。

ただしくも現代の『共産党宣言』と呼ばれているわが党の新綱領は、共産主義へ到達する道をさし示している」（前出、一四八ページ）。

みられるように、『報告』のこの冒頭の説明を一読すれば、たいていひとが当然のこととして受けとりがちなこのほんの「説きおこし」の中に、はやくも用意周到な論理的小細工がしくまれていることに気がつかれるであろう。フルシチョフはまず、「三つの世界史的段階」をあげ、つぎに「三つの綱領」をならべ、「最初の二段階」に「最初の二綱領」を対応させ、「最初の二段階」がその「いずれの段階でもつねに成功をおさめたのは、……戦闘的な革命的綱領をもっていたことによる……」と述べ、この「最初の二つの綱領」は、レーニンが「直接参加して、かれの指導のもとに作成された」と説明する。だが、はたして事実はどうなっているか？

「最初の第一の綱領」は、一八九五年以後レーニンによってその草案がつくられ、レーニンの指導のもとに一九〇三年採択・決定され、この「綱領」にもとづき同じくレーニンの指導のもとに十月革命がなしとげられ、「搾取者の支配を打倒し、プロレタリアートの独裁を樹立する段階」がつくりだされた。つぎに「第二の綱領」は、一九一九年同じくレーニ

ンの手に成る草案がロシア共産党第八回大会（一九一九年三月）で決定された。だが、この「第二の綱領」にもとづいて「社会主義の建設」をなしとげたのは、レーニン自身ではなくして、その直接の後継者であるスターリンの指導のもとでであった。スターリンこそは、まさに「レーニンに指示をもとめ、レーニンの先見の明ある構想――社会主義建設と共産主義建設にかんするかれの天才的思想をよりどころとし」、さらにこれをいっそう発展させて「社会主義の建設」をなしとげた当の指導者である。フルシチョフが、この明白な歴史的事実をおしかくし、ことさらスターリンの名を削りとり、あたかも「社会主義建設の綱領」と「社会主義建設の段階」との双方がともにレーニンの直接的指導のもとにつくりだされたかのような印象をあたえるべくつとめているのは、まことに作為的な論法といわざるをえない。このような意識的な「スターリン抹殺」は、かつて一九三九年三月ソ連邦共産党第一八回大会で「搾取階級残滓の最終的清算＝社会主義建設の完了」を宣明するスターリンの報告を前にして、ソ連邦共産党の最高幹部、中央委員、政治局（九名）の一員としてスターリンへの献身的な支持を表明してやまなかったエヌ・エス・フルシチョフ自身にたいするこのうえもない裏切りといわなければならない。

スターリンの指導のもとで政治局員として最高幹部の地位を占めていたそのフルシチョフが、つね日頃献身的忠誠を公然と表明していた当のスターリンの名を削りとって、レーニンの指導下で作られた「最初の二つの綱領」にすぐつづいてフルシチョフ自身の「起草」した「第三の綱領」をあげ、これをことさら「レーニン的綱領」と名づけているのは、まさに、レーニンそのひとにすぐつずく後継者、「第三の綱領」と「共産主義社会の創設の段階」とをつくりだした「レーニン的指導者」は、ほかならぬ報告者フルシチョフ自身だということを、つまり、レーニンの直接の後継者としての乃公自身の「世界史的地位と役割」を、第二二回大会の名において全世界にむかって宣明しようという、彼自身の

なみなみならぬ底意をあらわしているものなのである。

レーニンの直接の後継者、レーニン亡きあとの「レーニン的指導者」をもって自任するこのフルチョフ自身の手でつくりだされた「第三の綱領」なるものが、はたしてどのような「レーニン的綱領」であるかということは、その具体的内容について簡単な吟味を加えることで容易に見きわめがつくはずであるが、しかし、その吟味の手数をかけずとも、この「レーニン後継者」を僭称するフルシチョフの正体は、つぎのようなひとつの事実によって、つまり、その「レーニン的綱領」の発表後わずか三年足らずで、当の「レーニン後継者」の自家宣伝の効もなく、「共産主義社会の創設」を直接「指導」するいとまもあたえられず、はやくも「失脚」の憂目にあい、その「レーニン的指導者」の地位から永久に逐われるにいたったという歴史的事実そのものによって、白日のもとにさらされたものである、ということを指摘しておこう。このようにして「レーニン後継者」フルシチョフ個人はみごとに「失脚」したが、しかし、フルシチョフの修正主義路線がそのまま現指導層にひきつがれ、フルシチョフ修正主義理論の「展開」と「体系化」としての「新綱領」は、「満場一致」採択されて現指導層により忠実に守られているという事実もまた、動かしがたく現存している。それゆえ、フルシチョフの『綱領についての報告』の内容を吟味することによって、「新綱領」の修正主義的本質を明らかにすることは、今日もなお緊要な意義をもっているといわなければならない。

二

フルシチョフは、『綱領についての報告』の中の「共産主義は党と国民の偉大な目的である」というものものしい表題をつけた「Ⅱ」で、つぎのように述べている。

「綱領草案の基本点は、どういうものであろうか？

その要点は、**それが、具体的で、科学的に根拠づけられた共産主義建設の綱領だ**という点にある。草案には、共産主義の明るい建物をきずきあげる明確な道が示されている。これを見れば、その建物をどのようにしてつくりあげたらよいか、そして外観はどんなもので、内部はどのようになるか、そしてどんな人間がそこに住み、この共産主義の建物をいつそう便利に、いつそう美しくするために人びとはなにをするか、ということがわかる。われわれは、共産主義とはなにかということを知りたい人には、『われわれの綱領を読みたまえ！』と誇りをこめていうことができる」（前出、一六二ページ、ゴシック体―フルシチョフ）。

フルシチョフは、自身の手に成る「新綱領」を「具体的で、科学的に根拠づけられた共産主義建設の綱領」だと自讃している。われわれは、まもなく、それがどういう意味で「具体的」であり、どういう意味で「科学的に根拠づけられた」といわれるのかということをとくと知ることができるであろう。かれは、しきりに「建物」という言葉をつかい、「共産主義の明るい建物をきずきあげる明確な道」とか、「建物をどのようにしてつくりあげたらよいか」とか、「建物の外観はどんなもので、内部はどのようになるか」とか、この「建物をいっそう便利に、いっそう美しくするためになにをするか」とか、「建物」のことばかりあれこれ論じたてている。「共産主義建設」で最初から最後まで決定的に重要で第一義的地位を占めるのは、まさに「人間」の問題でなければならないのだ。フルシチョフは、その「人間」の問題をぬきにし、「建物」の体裁ばかり論じたて、「人間」については、すでに出来あがった「建物」の中に「どんな人間がそこに住むか」などという、内容空っぽの言葉を並べたてているにすぎない。

フルシチョフは、右の「具体的で、科学的に根拠づけられた共産主義建設の綱領」という手前味噌を合理化するために、すぐひきつづいて、同じく自画自讃的説明をつぎのように並べたてている（①、②……は、後段での説明のさいの便宜のため、山本がつけたもの）。

「①綱領草案は、**マルクス、エンゲルス、レーニンの革命理論の発展のうえで新しい段階**を画するものである。綱領は、共産主義

をめざす闘争のすべての根本的な理論問題と実践問題にたいし、また、現代の世界発展のもっとも重要な諸問題にたいして、明確な回答をあたえている。綱領草案を準備する上で巨大な、真に歴史的な意義があったのは、ソ連共産党第二〇回大会と第二一回大会であった。この両大会は、党生活とソヴェト社会の根本的諸問題を解決する上で、また世界発展の過程を分析する上で原則的に新しいものをたくさんもたらした。ソ連共産党第二〇回大会と第二一回大会がなかったならば、われわれがこうした綱領を作成するのは、はるかに困難な仕事となったことであろう。

②草案の全精神、その全内容は、**マルクス・レーニン主義理論と共産主義建設の実践との統一、その切っても切れない関連性**を反映している。綱領には、工業、農業、国家の発展、科学、文化の部面や、また共産主義的教育の部面における課題が具体的にきめられている。同志諸君、考えてもみたまえ。これほど長い歴史的期間をみこした社会発展の見通しがたてられるとは、ソヴェト国民はなんとすばらしい成長をとげたものではないか！

③党の第三の綱領は、全ソヴェト国民の綱領である。党が第一の綱領を採択したとき、党のあとについていったのは、先進的労働者の少数のグループであった。党が第二の綱領を採択したとき、党についていったのは、労働者階級と大多数の勤労農民とであった。いまや、党のあとには、全ソヴェト国民がついている。わが国民は、党の綱領を、自分自身の仕事、自分の生活の最大の目的とみたのである。

④**新綱領は、『すべてを人間のために、人間の幸福のために』という党のスローガンを完全に体現している。**この綱領では、国民の物質的福祉と文化をいっそう高める問題、人間の個性を開花させる問題が、もっとも重視されている。そしてこれはきわめて合法則的なことである。ボリシェヴィキが革命の旗をかかげたのは、勤労者の生活を喜びにみちた、しあわせなものにするためであった。党の第三の綱領は、ソヴェト国民が、その偉大な事業のために耐えてきたかずかずの困難と欠乏にたいする報酬が、何百倍にもなって返ってくるような時代の到来を告げている」（前出、一六二―一六三ページ、ゴシック体―フルシチョフ、傍点―山本）。

まず①のなかの、傍点をつけた個所をごらんいただきたい。かれ自身告白しているように、この「新綱領」は、第二〇回大会の『フルシチョフ報告』の中の第一章第六節「現在の国際的発展の原則的諸問題」の中味をそのままもってきて、その中核にすえたものである。つまり、かれ自身「原則的に新しいものをたくさんもたらした」と並べたてている

るそのことは、まぎれもないレーニン主義修正、その世紀的な改ざんにほかならないのであって、その「基本」は、

第一、「物資があふれでるようにたくさんつくりだされる」ようになることが、共産主義社会建設の唯一の、基本的な方策であるという考え方、

第二、人間はすべて個人的・物質的利益を第一におきそのためにだけ行動するものだという考え方、

第三、世界共産主義運動の中で「最優先」すべきはソ連邦をいちはやく共産主義社会に到達させることだという、自国の利益最優先主義、

第四、ソ連邦共産主義社会建設を「最優先」させるために、その他のいっさいの国の革命運動、民族解放闘争は、強力的で戦争に導く恐れがあるものであってはならず、終始一貫平和的なものでなければならないという、臆面もない強力革命運動抑圧の主張[2]、である。

（2）　本論稿第六節の「二」（本誌第二十二巻第一号、一二四―一二五ページ）参照。

これらの「基本」のうち「新綱領」にとってとりわけ決定的重みをもっているのは、いうまでもなく第三と第四であって、このことは、右の引用個所にすぐつづいて述べられている「国際的条件」および「国際的責務」にかんするつぎの臆面もない主張の中にもあきらかに示されている。

「綱領草案は、つぎのような、新しい国際的諸条件をもとにしている。すなわち、**共産主義の建設が、資本主義の包囲下ではなく、社会主義世界体制が存在し、社会主義勢力が帝国主義勢力にたいして、平和勢力が戦争勢力にたいしてますます優位を占めつつある情勢のなかで、展開されているということである。**もちろん、帝国主義諸国家は、ソヴェトの国に国防費の負担をよぎなくさせることによって、わが国の経済的・社会的進歩をあらゆる手段で妨害しようとするであろう。もし、このことがなければ、わが国の発達速度はさらに早いものとなっていたであろう。それと同時に、社会主義勢力が成長し、世界帝国主義が弱まるにつれ

て、われわれの経済建設と文化建設にとっても有利な条件がつくりだされるであろう。

わが党の綱領は、社会主義的国際主義の精神でつらぬかれている。レーニン党は、外国の兄弟にたいする義務をつねに誠実にはたしてきた。一九一七年一〇月に党は、解放の朝映を世界の空に燃えたたせた。党は、あらゆる国民によく見え、かれらに新制度への道を照らしだす社会主義の燈台をきずきあげた。レーニン党は、これからも、国際主義の旗を高くかかげてすすむであろう。いま党は、歴史的にみて短い期間内に共産主義を建設することが、自分の主要な国際的責務だと見ている。

綱領草案は、**真の共産主義的ヒューマニズムの文書であり、平和と諸国民の友愛の思想でつらぬかれている。**……」（前出、一六三ページ、ゴシック体―フルシチョフ、傍点―山本）。

「自分の国だけいちはやく物資があふれでるように福祉ゆたかな国にしたい」という、物欲第一主義と自国の利益最優先主義の立場にたつときには、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの数億に上る諸民族がアメリカ帝国主義とその手先きどもの言語に絶する凶暴な収奪・殺戮・暴行のもとに呻吟しているという事実はみな消えうせてしまい、その眼に映るものとては、ただ「ますます弱まりつつある帝国主義勢力」と「ますます優位を占めつつある社会主義勢力」との二つだけという、世にもふしぎな「新しい国際的諸条件」ばかりである。あくなき収奪・殺戮・暴行のもとに呻吟している数億の勤労人民という「餌」がいることなくして、よくもまあ帝国主義的狼どもは生きながらえることができたものである！　これら数千万、数億の勤労人民を全面的に援助し帝国主義的狼どもの凶暴な支配・抑圧の黒い手を完全にうちのめし駆逐するために、経済的にも政治的にもありとあらゆる手段により、ともにたたかうべくいっさいを注ぎこみ、自国の「経済的・社会的進歩」には第二次的意義しか認めないこと――これこそ、真のレーニン党の採るべき唯一の社会主義的国際主義である。ところがあきれたことに、この自国利益最優先主義に凝り固った修正主義的俗物は、「帝国主義がソヴェトの国に国防費の負担をよぎなくさせる」といって愚痴をこぼし、それで「わが国の経済的・社会的進歩が妨害される」ことばかりを心配している。その物欲第一主義の根深さは、自国利益最優先主義こそが、つ

まり「ソヴェトの国がいちはやく物資のあふれでる共産主義に首尾よく成り上る」ことこそが、「自分の主要な国際的責務」だなどというおどろくべきタワ言を平然と言い放し、こういうのが「社会主義的国際主義の精神」だと強弁して恬として恥じないというまでに、手のつけられないものになっているのである。帝国主義的狼どもの飽くなき残忍な収奪・暴行・殺戮のもとにある数億の勤労人民にたいして、自分たちのふところの豊かな物資をさくことすらせず、ひたすらに「自国だけ物資のあふれでる共産主義に成り上る」ことをこいねがい、「新制度の道を照らしだす社会主義の燈台をきずきあげる」ことばかりに、「国際主義の旗を高くかかげてすすむ」ことばかりに懸命となっているような連中、――いったい、これほど醜悪な、これほど恥しらずな反レーニン主義者、露骨な反革命の親帝国主義者、国際共産主義運動への鉄面皮な裏切り者がほかにあるだろうか！　しかも、この鉄面皮な反革命的親帝国主義をもって、「真の共産主義的ヒューマニズム」だとか「諸国民の友愛の思想」だなどと宣伝してまわっているのである！(3)

(3)　「ソ連邦共産主義社会建設最優先主義」をもって「社会主義的国際主義の精神」のあらわれだとか、「真の共産主義的ヒューマニズムの発露」だとかとふれまわるこの種の修正主義的俗物の立場そのものが、レーニンの教示する真の国際主義の立場とどんなに背反し、これを完全にふみにじっているかということをなおはっきりととらえるために、われわれは、つぎにこの問題にかんするレーニンの明確な指示を引用してかかげることにしよう。これは、レーニン自身の作製した『民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案（共産主義インタナショナル第二回大会のために）』のなかの「一〇」としてかかげられているものである。

「口さきで国際主義をみとめながら、実際にはあらゆる宣伝、煽動、実践活動のなかで、それを小市民的な民族主義や平和主義にすりかえることは、第二インタナショナルの諸党のあいだばかりでなく、このインタナショナルから脱退した諸党のあいだでも、そしていまでは共産党と自称している諸党のあいだでさえもめずらしくないように、もっともありふれた現象となっている。プロレタリアートの独裁を、一国的な（すなわち一国に存在していて、世界政治を規定することのできない）ものか

ら国際的なもの（すなわち世界政治全体に決定的な影響をおよぼすことができる、すくなくともいくつかの先進国のプロレタリアートの独裁）へ転化させる任務が、緊急になればなるほど、このような害悪とたたかい、このようなもっとも根ぶかい小ブルジョア的な民族主義的偏見とたたかうことが、ますます第一位に出てくる。小ブルジョア民族主義は、民族同権の承認を国際主義ととなえ、しかもただそれだけであって、民族的利己心は不可侵のものとしてのこしている（このような承認が、まったく口先きだけのものであることは、いうまでもない）。ところが、**プロレタリア国際主義は、第一に、一国のプロレタリア的闘争の利益に従属させることを要求し、第二に、ブルジョアジーにたいする勝利を実現しつつある民族にたいしては、国際資本を打倒するために最大の民族的犠牲をも甘受する能力と覚悟をもつことを要求する**」（全集第四版、第三十一巻、一二六ページ、傍点およびゴシック体—山本）。

みられるように、レーニンは、「民族的利己心は不可侵のものとしてのこし」これに執着しているものを「小ブルジョア民族主義」として断罪し、「プロレタリア国際主義」こそは、まさに「自国のプロレタリア的闘争の利益」を「世界的な規模のプロレタリア的闘争の利益」に従属させるものであり、社会主義革命をなしとげた民族には、当然に、「国際資本」（＝アメリカ帝国主義）を打倒するために「最大の民族的犠牲をも甘受する能力と覚悟をもつことを要求する」ものであると明示している。このレーニン的国際主義の立場からみれば、「自国共産主義社会建設最優先主義」のごときは、「小ブルジョア民族主義」どころか、正真正銘の反革命的裏切りといわなければならない。

では、「社会主義革命に勝利した国」は、どのようにして「最大の民族的犠牲をも甘受し」「国際資本を打倒するために」行動すべきであるか？　この点についても、レーニンは疑う余地のない路線を明示している。

「経済的および政治的発展の不均等性は、資本主義の無条件的な法則である。ここからして、社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国ででも可能である、という結論がでてくる。この国の勝利したプロレタリアートは、資本家を収奪し、自国に社会主義的生産を組織したのち、他の資本主義世界**にたいして**立ちあがり、他の国々の被抑圧階級を自分のほうに引きつけ、それらの国内で資本家にたいする蜂起をおこし、必要なばあいには、武力に訴えても搾取階級とその国家に反対して行動するであろう」（前出、第二十一巻、三一一ページ、ゴシック体—レーニン、傍点—山本）。

「勝利したプロレタリアート」は「資本家を収奪し、自国に社会主義的生産を組織したのち」には、なによりもまず「自国で物資があふれでるようになるためにもっぱら生産力を高め、いち早く共産主義社会に到達する」ことを心がけるべしと、教示正しい批判はいかにあるべきか

されているか？　とんでもない。レーニンは、「自国に社会主義的生産を組織し」おえたならば、それ以上「自国の利益ばかり追求する」ことは許されない「国際資本」(＝アメリカ帝国主義)を打倒するために「最大の民族的犠牲をも甘受する能力と覚悟」をもつべきである、そして、ただちに、「他の資本主義世界にたいして立ちあがる」べきであると教示している。「他の国々の」数億の、アメリカ帝国主義とその手先きどもの支配・圧制のもとに呻吟している勤労人民、被抑圧階級を「自分の方にひきつけ」、それによって、「それらの国内で資本家にたいする蜂起をおこす」ことに努め、「必要な場合には武力に訴えても搾取階級とその国家に反対して行動する」ことをしなければならぬ――これこそが、真のプロレタリア国際主義であると、明示されているのである。

ところが、レーニンの「直接の後継者」をもって自任するフルシチョフは、「最大の民族的犠牲を甘受する」どころではなく、また、「他の資本主義世界に対抗して立ちあがる」どころでもなく、まさにその正反対に、「自国の利益最優先主義、ソ連共産主義社会建設第一主義」の旗をかかげ、そのためには、「世界的強盗、最大の収奪者」＝アメリカ帝国主義者とその手先きどもと仲よく並んで存在し(平和共存!!)、かれらと「信頼をつよめ、協力することが必要だ」などと強弁し、「他の国々の被抑圧階級」が「蜂起をおこし」「武力に訴える」ことを極力おさえつけて、「自分の国だけがいち早く物資のあふれでるような共産主義社会に成り上ることが、自分たちの国際的責務である、これが真の共産主義的ヒューマニズムである」などといいふらしている。レーニンの明白な教示をふみにじり、プロレタリア国際主義のレーニン的方針に泥をぬりながら、なおかつレーニンの「直接の後継者」を僭称していられるとは、なんとあきれはてた、憎むべき変節漢であろうか！

②の中で「綱領には、工業、農業、国家の発展、科学、文化の部面や、また共産主義的教育の部面における課題が具体的にきめられている」と述べられてあるのは、「一九六〇年から一九八〇年まで」の「二〇年」間に「物資があふれでるようになり、国民が最高の生活水準を享受できるようになる」という、その「成果」、つまり「計画数字」が並べられている、ということである。たとえば、「向う二〇年間に」「社会的総生産物は、約五倍にふえる」(前出、一七一ページ)とか、「ソ連邦をのぞいた世界の他のすべての国々の現在の総発電量の約一倍半の電力を生産するようになる」(前出、一七三ページ)とか、「農産物の総生産高を約三倍半に、穀物のそれを二倍以上に、肉をほとんど四倍に、牛乳をほとんど二倍にふやす」(前出、一七九ページ)とか、

「人口一人あたりの実質所得が、三・五倍以上になる」（前出、一九七ページ）とか、「国民の無料教育と無料診療、住宅、ガス、電気その他および市内交通機関を無料で利用させる」（前出、二〇〇ページ、傍点—山本）ようになるとかいったような「目論見書」である。つまり、レーニンの「直接的後継者」フルシチョフの弁舌にかかれば、「あふれでるようになる物資」の「目録」を並べたてることが、そもそも「…部面における課題が具体的にきめられている」ことなのである！　かれは、自身の手で「具体的にきめられた課題」、つまり「目録」のすばらしさに有頂天になって、「これほど長い歴史的期間をみこした社会発展の見通しがたてられるとは、ソヴェト国民はなんとすばらしい成長をとげたものではないか！」などと、感嘆の声を放っているほどである。「狸の皮算用」よろしく「すばらしい数字」を並べたてれば、それがなんと「社会発展の見通しをたてる」ことになる！　わずか「二〇年」という短い期間さえ、かれの舌の先きにかかると、「これほど長い歴史的期間」になってしまう（もっとも「五ヵ年計画」にくらべれば、二〇年間は、まさに、その四倍の長さではある！）。とりわけかれの俗物根性をさらけだしているのは、「ソヴェト国民はなんとすばらしい成長をとげたものではないか」という、空々しい賞め言葉である。フルシチョフと現「指導層」のふりまく「物質的関心の原則」でたぶらかされた多数の「ソヴェト国民」は、「社会発展の見通し」どころか、各自の物質的利益増大にけんめいである。つまり、フルシチョフが「なんとすばらしい成長をとげたものではないか」と賞めたてたいのは、「ソヴェト国民」などではまったくなく、ほかならぬ「ソ連共産党指導層」であり、つづめていえば、その「最高指導者」、レーニンの「直接的後継者」フルシチョフ御本人なのである。はっきりいえば、この「二〇年間」という「これほど長い歴史的期間をみこした社会発展の見通しをたてた」とは、「レーニンの後継者、フルシチョフはなんとすばらしいではないか！」ということなのである。右の「ソヴェト国民」がほかならぬ「フルシチョフ自身」の見えすいた変え言葉であることぐらい、「見通し」のできない

人間がこの世にいるだろうか！

③で述べられているのは、レーニンの直接的指導のもとにつくられた「第一の綱領」および「第二の綱領」にくらべて、フルシチョフ自身のつくった「第三の綱領」がどんなにすぐれているかという、手前味噌である。このばあい、かれは、各綱領の内容について具体的に比較検討することなどいっさいしないで、ただ、どれだけ大勢の人が「党のあとについていった」かという点についてだけ、いい加減な「比較」をしている。つまり、「第一の綱領を採択したとき、党のあとについていった」のは「先進的労働者の少数のグループ」でしかなく、また、「第二の綱領を採択したとき、党のあとについていった」のは「労働者階級と大多数の勤労農民」にかぎられていたが、いまや「第三の綱領の採択」にあたって「党のあとについている」のは「全ソヴェト国民」である、「全ソヴェト国民」の支持をうけている「第三の綱領」こそもっともすばらしいものではないか、というしだいである。だが、いったい、こういう「比較」は、すこしでも当を得たものといえるだろうか？　とんでもないことである。それは、それぞれの綱領についてまったくでたらめの「事実」を並べたてているという点で、この上もなく悪質なペテンといわなければならない。

いったい、「党のあとについていった」（за партией шли）というのは、どういう事実を指していったものであるか？　それは、たとえば、「スターリンの『あとについていった』のは、フルシチフはじめその他の政治局員全員であった」とか、「野坂理論の『あとについていった』のは、当時の日共指導層全員であった」とかいう場合の「あとについていった」という言葉と同じ意味の、「あとつき」であるのか？

綱領は、労働者階級のうちの前衛部隊がつくりあげるものであって、どんな敵階級と、どのようにたたかい、これをどのようにして打倒して社会主義への道をきりひらくかという、革命闘争の基本方針、その基本路線を明確にする

ものである。しかし、その綱領の指し示すところをはっきりつかみ、敵階級打倒の革命闘争にたちあがり、階級闘争の主力部隊となるのは、前衛部隊ではなく、まさに労働者階級本隊とその他の勤労人民大衆全体でなければならないし、また、その主力部隊が広汎な労働者階級および勤労人民大衆から構成されているときにはじめて敵階級にうちかち、革命闘争を勝利に導くことができるのである。こういうことは、マルクス・レーニン主義の「基本」であり、また、あらゆる国の革命闘争の歴史がこれを実証しているのだが、いったい、こういうことが全くわからない「共産党指導者」などいるだろうか？　「あとについていった」というのは、その綱領の正しさを確信し、党に絶対の信頼を寄せ、その指導のもとに敵階級打倒の革命闘争に挺身したということにほかならない。それゆえ、「党が第一の綱領を採択したとき」にも「第二の綱領を採択したとき」にも、つねに「党のあとについていった」のは、まさに「労働者階級の主力部隊と勤労人民大衆」であったのである。そして、たとえば勤労農民層のような勤労人民層と労働者階級とのあいだの「階級的差異」がすっかりなくならないかぎり、革命闘争および社会主義社会・共産主義社会建設の主力部隊は、つねに「労働者階級とその他の勤労人民大衆」でなければならない。さらに、フルシチョフ自身明言しているように、現在でもソ連邦に「労働者と農民の階級的差異」が現存しているのであるから、ソ連邦での「共産主義社会建設」が完全に達成されるまでのあいだは、その主力部隊は、いぜんとして「労働者階級とその他の勤労人民大衆」でなければならない。それゆえ、三つの綱領とも同じように、「党のあとについていった」のは、つねに「労働者階級とその他の勤労人民大衆」であり、それらがちがうのは、そのときどきの「敵階級」の中味についてであったということは、疑う余地がない。それにもかかわらず、フルシチョフが「党が第一の綱領を採択したとき、党のあとについていったのは、先進的労働者の少数のグループであった」などと述べたてているとすれば、そしてまた、「いまや、党のあとには全ソヴェト国民がついてい(4)

る」などと述べたてているとすれば、これは、綱領の重大な意義を傷つけ、歴史を完全に歪曲するものであり、このような陋劣な論法で「第三の綱領」が前二者にくらべてよりすぐれているということを誇示し、したがってまたその作製者たち自身の「功績の偉大さ」を誇示しようとするものであって、まったく裏切り的俗物にふさわしい野心家的自己宣伝といわなければならない。

（4）「敵階級」の中味の移り変りにつれて、「その他の勤労人民大衆」の中味もまた当然に変化がなければならず、事実またその内容の変化を正しくとらえることはきわめて重要な意義をもつものではあるが、このばあい、そこまでたちいって論究することは必ずしも必要ではないので、さしあたり「勤労人民大衆」という表現をそのまま採用しておくことにとどめた。

④で強調されているのは、さきに『第二〇回大会報告』について指摘された「物質的利益第一主義」の一貫した主張であって、しかも、そこには、この「物欲第一主義」をもって「ソヴェト国民」を「釣ろう」という魂胆が、ありありとみすかされる。「その偉大な事業のために耐えてきた数かずの困難と欠乏にたいする報酬（?!）が、何百倍（?!）にもなって返ってくる」！　つまり、「ソヴェト国民」は、「物資があふれでるようになり、報酬が何百倍にもなって返ってくる」という「その偉大な事業」をうまくやりとげるために「数かずの困難や欠乏に耐えてきた」、というしだいである。そして、「ボリシェヴィキ」は、このように「その報酬が何百倍にもなって返ってくるように」するために「革命の旗をかかげた」のである！

そこで、この「物欲第一主義」の「権化」ともいうべき自称「レーニンの直接的後継者」が、「共産主義とはいかなるものか」という肝腎の問題にたいして、どういう「考え」をいだいているかという点を、つぎに検討してみることにしよう。

三

フルショフは、右につづいてその「Ⅱ」で、「共産主義は人類の未来の夢である」と強調し、誇らかに「その夢を実現するのは、まさにわれわれである」ということを述べたて、ついで「共産主義」について、こう説明する。

「綱領草案には、共産主義について、つぎのような規定があたえられている。

『共産主義とは、生産手段が単一の全人民的所有となっており、社会の全成員が完全に社会的に平等であるような、階級のない社会制度のことである。そこでは、人間の全面的な発展にともなって、生産力もまた、不断に進歩する科学と技術にもとづいて発展し、社会の富のすべての源泉が満々とした流れとなってあふれだし、「各人は能力に応じて働き、欲望に応じてうけとる」という偉大な原則が実現される。共産主義とは、自由な、自覚した勤労者の高度に組織された社会であって、そこでは社会的自治が根をおろし、社会の幸福のための労働が、万人にとって第一の生活欲求、自覚された必要となり、各人の能力は、国民に最大の利益をもたらすように用いられる』」（前出、一六四―一六五ページ）。

ごらんのように、フルシチョフによって考えられた「共産主義」とは、つぎのようなものである。

1.「生産手段が単一の全人民的所有となっている」。
2.「社会の全成員は完全に社会的に平等である、階級のない社会」。
3.「社会の富があふれだし、『各人は能力に応じて働き、必要に応じてうけとる』という原則が実現される」。
4.「人間が全面的発展」をとげ、「社会の幸福のための労働が万人にとっての第一の生活欲求、自覚された必要となる」。

みられるように、まことにりっぱな申し分のない「理想郷（ユートピア）」である。わが榊氏ならずとも、もしこの「理想郷」がいまから二十年足らずでこの地球上に出現するはずだと聞かされれば、誰しも、榊氏同様感きわまって「人類の夢を実現するもの」とかなんとか懸命のお世辞を並べずにはいられなくなるようなものである。では、この「人類の夢」はどのようにして実現されるか、いったいどれだけ長い年月と多くの困難が必要なのか？といえば、これにたいするフ

ルシチョフの答えは、まことにレーニンの「直接的後継者」にふさわしく、簡単しごくである。――曰く、「社会主義から共産主義への移行は、階級闘争もなく、さしたる困難もなく、順調におこなわれる」、だから、「共産主義社会を基本的に建設するには、二〇年で充分である」と。ここでフルシチョフがあやつるのは、「社会主義から共産主義への移行」は「資本主義から社会主義への移行」とは「根本的にちがう」のだという、つぎのようなまやかし論法である。

「マルクス・レーニン主義の古典家たちは、共産主義が社会主義から壁で仕切られたものでなく、同じ一つの社会経済構成体の二つの段階であり、そのちがいは経済の発展の度合と、社会諸関係の成熟の度合にあることを強調した。

社会主義はそれ自身の基礎の上に発展したものではない。社会主義は、その数々の世界史的な大成果にもかかわらず、経済、道徳、法、人々の意識といった多くの面で、自分が出てきた母胎である古い社会制度の名ごりをまだとどめている。共産主義は、より高度な、より完成した社会生活の段階であって、社会主義が十分に根をおろしたときにはじめて発展していくことができる。共産主義のもとでは、資本主義制度のいっさいの残存物が完全に跡をたつ。

共産主義がそれ自身の基礎にたって発展するものであることから共産主義を創設する過程の特殊性がきまってくる。資本主義から社会主義への移行は、階級闘争の条件のもとで実現され、そのためには社会諸関係を根本的に破壊し、深刻な社会革命をおこない、プロレタリアートの独裁をうちたてることが必要である。これとちがって、共産主義への移行は、搾取者階級がおらず、労働者、農民、インテリゲンチャという社会の全成員が、共産主義の勝利に切実な関心をもち、そのために意識的に努力している条件のもとでおこなわれる。だから、当然、共産主義の建設は、もっとも民主的な方法によって、社会諸関係がいっそう完全なものとなり発展していき、古い生活形態が死滅し、新しい生活形態が発生し、それらがからみあい、たがいに影響しあうという仕方でおこなわれる。社会はもう国内の階級闘争がうみだす困難を味わうことはないであろう。すべてこうしたことのために共産主義への移行期には、社会発展の速度を早めることが可能となる」（前出、一六六ページ、傍点―山本）。

フルシチョフの主張は、いたって「簡単明瞭」である。社会主義は資本主義の「基礎」の上に「発展」したもの、共産主義は社会主義の「基礎」の上に「発展」したものである、[5] 資本主義と社会主義とはまったく異質のものだが、

社会主義と共産主義とは、同じ質、「同じ一つの社会経済構成体」であって、そのちがいは「量的差異」にすぎない、だから、「資本主義から社会主義への移行」には「階級闘争」、「社会諸関係の根本的破壊」、「深刻な社会革命」、「プロレタリアートの独裁」が必要であるが、これに反して、「社会主義から共産主義への移行」は「もっとも民主的な方法」により、「階級闘争」なしに、「社会諸関係がいっそう完全なものとなる」だけで十分だ、[6] というしだいである。

(5) フルシチョフは、「共産主義がそれ自身の基礎にたって発展する」(Коммунизм развивается на своей собственной основе.) などと述べたてている。いったい「共産主義」が「共産主義の基礎にたって発展する」とは、どういうことか？ かれは、先きに、社会主義と共産主義とが「同じ一つの社会経済構成体の二つの段階」にすぎないという文句をかかげておいたので「社会主義の基礎の上に」と云うべきところを、ことさら「それ自身の基礎にたって」と云いかえたものであろうか？ だが、いずれにせよ、これは、純然たるトォトロギーである。

(6) フルシチョフは、「共産主義への移行」が「古い生活形態が死滅し、新しい生活形態が発生し、それらがからみあい、たがいに影響しあうという仕方でおこなわれる」などという、迷文句を並べたてている。いったい、「古い生活形態」とは、なにか？ また、「古い生活形態が死滅し」たというのに、このすでに「死滅し」たものが、「新しい生活形態」と「からみあう」か「たがいに影響しあう」などという「弁証法的作用」を、どうしておよぼすことができようか？ すでに「死滅し」たものとがまた「からみあう」とは、なんとすばらしい「発展＝移行」ではあるまいか！

では、「社会主義」とは、いったい、どういう「社会経済構成体」を指していうのか？ フルシチョフは、「経済、道徳、法、人々の意識といった多くの面で、自分が出てきた母胎である古い社会制度の名ごりをとどめている」社会だとしており、右に引用した個所にすぐつづいて、はっきりと、「階級間の差異がまだ存在している階級社会」、「都市と農村との本質的差異」や「肉体労働と知能労働との本質的差異が残っている社会」であると明示している。たとえ資本主義社会が「深刻な社会革命」によって社会主義社会に変革されたとしても、かつての搾取者、資本家・地主層は全部死にたえたわけで

はなく、そのまま生きながらえており、おまけに「経済、道徳、法、人々の意識といった多くの面で、搾取階級の支配していた資本主義社会制度の名ごりをとどめている」というような事態のもとでは、――かりに「搾取者階級は階級としてはおらず」ということができるとしても、――フルシチョフ自身確認しているように、「まだ存在している階級間の差異の遺物」はきわめて根強いものがあり、したがって、かれが簡単に並べたてている「搾取者階級がおらず、労働者、農民、インテリゲンチャという社会の全成員が、共産主義の勝利に切実な関心をもち、そのために意識的に努力している条件」などというものは、もとより存在しようもないものである。要するに、現在のソ連邦は、社会主義段階にあるとはいっても、その社会主義なるものは、「共産主義と同じ一つの社会経済構成体の二つの段階」の一つと言えるようなものではけっしてなく、ましてや、「共産主義がそれ自身の基礎にたって発展するものである」という場合の「基礎」としての社会主義などとはまったくかけはなれたものである。

ところで、フルシチョフが公式的に並べているだけの「資本主義制度のいっさいの残存物」とか「階級間の差異の残存」とかいう言葉は、どういう事実を指していったものであろうか？　たとえば、「モスクワ精神病予防治療所のある付属工場の工場長とその仲間が、『ヤミ企業』をつくり、ワイロをつかって『五八台のメリヤス機』と大量の原料を『手に入れ』、『五二の工場、手工業協同組合、コルホーズ』とコネをつけ、数年の間に三〇〇万ルーブルもかせいだ。かれらは、社会保安機関の勤務員、監査係、検査係、巡視係などを買収していた」（一九六三年十月二〇日付「イズベスチャ」）とか、「白ロシアのあるコルホーズの議長が、『封土を与えられた大名気どりで』『なんでも独断で処理した』。かれは、コルホーズなどには住まないで、都会か、自分の『豪華な別荘』に住み、いつも『いろいろな商売の経営に忙しく』、『投機取引』に明け暮れていた。かれはよそから家畜を買ってきて、自分のコルホーズの家畜だといつわり、ウソの生産成績を報告していた。だが、それにもかかわらず、かれは、『いつも賞

めたたえられる』『模範的な指導者』になっていた」（一九六一年二月六日付「プラウダ」）とか、「レニングラードのある『ソ連の婦人資本家』は、労働者を雇ってナイロンブラウスの生産と販売をおこない、『日に七〇〇新ルーブルもかせいだ』」（一九六三年四月九日付「イズベスチャ」）とか、「ゴメル州のある個人経営企業主は、『労働者と職人を雇い入れて』、三年間のうちに一二の焙焼炉建設工事や大がかりな修理工事を高値で請け負った」（一九六〇年十月十八日付「イズベスチャ」）とかいった多くの事実が示すように、[7] 今日でも、「ソ連の資本家」、「新しい企業家」、「個人経営の企業主」、「新しい富農」、「投機商人」、「搾取者」という名称をもってソ連邦の各新聞紙上を賑わしている多数の人間が実在している[8]ということは、いったい、どのように説明されるべきであろうか？　これらの名称そのものがすでに、「搾取者階級がおらず、労働者、農民、インテリゲンチャという社会の全成員が、共産主義の勝利に切実な関心をもち、そのために意識的に努力している条件」などという、ありもしない「条件」の虚構ぶりを暴露していることは、明白ではあるまいか？

（7）これらの事実は、「人民日報」編集部・「紅旗」編集部『フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓』（一九六四年七月十四日、「九評」）の中で数多く指摘されているものであって、拙稿では、その一部分を一例証のため一借りて引用した。

（8）フルシチョフは、この『報告』の「Ⅳ　共産主義的社会関係の発展と新しい人間の形成」の「2　プロレタリアートの独裁の国家から全人民的国家へ」の中で、「ヴェ・イ・レーニンは、労働者階級に独裁が必要なのは、社会主義社会を建設し、人間による人間の一切の搾取を根絶するためであると教えている。……したがって、マルクスとレーニンによれば、プロレタリアートの独裁の国家は、資本主義から社会主義への過渡期の国家なのである」と述べ、ついで、「わが国で社会主義が**完全にかつ最終的に**勝利したとき、そしてわれわれが**共産主義の全面的建設**期にはいったとき、プロレタリアートの独裁を必要とする諸条件がなくなり、プロレタリアートの独裁の国内的な課題がすでに遂行されたことはもちろんである」という断定をかかげ、ここからして、「労働者階級の独裁の国家」はすでに「全人民的国家に改革」された、「共産主義を建設するためには、もうプロレタリアートの独裁はいらない。わが社会の勤労者すべては平等である」（前出、二一〇―二一一ページ、ゴシック体―フルシチョフ）という「結論」をひきだしている。それゆえ、ソ連邦の新聞紙上を賑わしている「ソ連の資本家」、「新

しい企業家」、「投機商人」、「搾取者」たちの一群は、ひとしく「勤労者」として「平等」であり、「勤労者」としてその「権利、自由、名誉、品格は、社会と国によって厳重に保護されるであろう」（前出、二一二ページ）ということになる。なんと、かれら「資本家」、「企業家」、「投機者」、「搾取者」たちにとってありがたい「全人民的国家」であろうか。この点からみるとき、「プロレタリアートの独裁はすでに不要であって一日も早く廃棄されるべきである」という「主張」をいちはやくかかげ、これを最後までつらぬくことを―フルシチョフとともに―固執するのは、まさにこれらの「先見の明ある」「新しい資本家」、「投機者」、「企業家」、「搾取者」たちでなければならないという「事実」も、十分理解できるのである。

フルシチョフは、つづいて「基本的に共産主義を建設するとは、どういうことであろうか?」という「問題」を自ら提起し、これにたいして自身つぎのように答える。

「――**経済の**領域では、共産主義の物質的＝技術的基礎がつくりあげられるであろう。ソ連邦は、もっとも発達した資本主義諸国の経済的水準を上廻り、人口一人当りの製品生産高で首位を占めるようになるであろう。国民に世界最高の生活水準が保障されるであろう。物質的財貨と文化財がありあまるようになるための条件がつくりだされるであろう。

――**社会**関係の領域では、まだ存在している階級間の差異の遺物が一掃され、諸階級は融合して、共産主義的勤労者の無階級社会をつくるであろう。都市と農村との間の、ついで肉体労働と知能労働のあいだの本質的な差異が基本的にとりのぞかれ、諸民族の経済的・思想的共通性が高まり、高度の思想性、広い教養、道徳的純潔および肉体的完全さを調和的に結びつけた共産主義社会の人間の品性が発展してくるであろう。

――**政治**の領域では、それは、すべての市民が公共事業の管理にたずさわり、社会主義的民主主義がこのうえなく広く発展する結果、社会の共産主義的自治の諸原則を完全に実現する準備をととのえていくことを意味する」（前出、一六七ページ、ゴシック体―フルシチョフ）。

では、ここに述べられているような「共産主義の基本的建設」は、いったい、どのようにして成しとげられるか?フルシチョフは、これにたいして、簡単にこう答える、――曰く、「共産主義の物質的＝技術的基礎がつくりだされることによって」、と。

「今後二〇年のあいだに、ソ連邦には、共産主義の物質的＝技術的基礎がつくりだされるであろう。これが、わが党の主要な経済上の課題であり、党の基本方針の土台である。

共産主義の物質的＝技術的基礎の建設は、経済的・社会的・文化的諸課題の鎖における決定的な環であり、わが祖国の発展の内的および外的諸条件が要求するところのものである。これによってわれわれは、つぎのきわめて重要な諸課題を解決することができるであろう。

第一に、空前の強大な生産力をつくりだし、人口一人当りの生産高で世界の首位を占めること。

第二に、新しい社会制度が勝利するうえに、これが結局一番重要で一番肝腎なことだが、世界最高の労働生産性を確保し、ソヴェト国民を最新式の技術で装備し、労働を喜びとはげましと創造の源に変えること。

第三に、ソヴェト国民のあらゆる欲望をみたすため、物質的財貨の生産を発展させ、全住民に最高の生活水準を保障し、その後欲望に応じた分配に移るためのいっさいの条件をつくりだすこと。

第四に、社会主義的生産関係をしだいに共産主義的生産関係につくりかえ、階級のない社会をつくりだし、都市と農村のあいだ、ついで知能労働と肉体労働のあいだの本質的差異をなくすこと。

最後に、共産主義の物質的＝技術的基礎を建設することによってのみ、資本主義との経済競争に勝つことができ、またソ連邦および社会主義世界全体にあえて襲いかかってくるどんな侵略者をも壊滅させうる水準に、国防をつねにたもつことができるのである」(9)（前出、一六八ページ、ゴシック体―フルシチョフ、傍点―山本）。

（9）さきに第二〇回大会の『報告』でかかげられたソ連共産主義社会建設最優先主義が、ここでも明確に示されている。帝国主義者の武力による侵略・収奪・殺戮によって数億の勤労人民大衆が呻吟しているとき、この強盗ども＝帝国主義者たちと仲よく「経済競争」をしてこれに勝つのだなどと主張する「社会主義国指導者」がいる！　強盗どもの抑圧のくびきのもとに数億の人民大衆をほったらかしておき、しかも「社会主義世界」に属するヨーロッパの先進「社会主義国」がつつぎぎと、この強盗どもの糖衣砲弾のもとにあえなく変質をとげ崩壊寸前にあるという事態を前にして、この「社会主義国指導者」は、「どんな侵略者をも壊滅させうる水準に国防をつねにたもつことができる」などと、大見得をきっているのである！

ごらんのように、「共産主義の物質的＝技術的基礎の建設」によって、「空前の強大な生産力」、「世界首位の人口一人当

正しい批判はいかにあるべきか

り生産高」、「世界最高の労働生産性」、「最高の生活水準」が達成されるのだ、とフルシチョフはいう。では、「共産主義の物質的＝技術的基礎の建設」とは、いったい、どういうことを指していうのか？ フルシチョフによれば、「共産主義の物質的＝技術的基礎の建設」とは、まさに、「空前の強大な生産力」の建設、「世界首位の人口一人当り生産高」および「世界最高の労働生産性」の達成、「世界最高の生活水準」の達成以外のなにものでもありえない。それゆえ、「レーニンの直接的後継者」フルシチョフは、**「共産主義の物質的＝技術的基礎の建設」という一見まことしやかな「術語」をあやつって、「世界最高の労働生産性、等々の達成」によって「世界最高の労働生産性、等々の達成」という「課題が解決される」という、トオトロギー的ペテン論法を弄しているのである！**

フルシチョフは、さらにつづいて、「向う二〇年間に共産主義の物質的＝技術的基礎をつくりだすために必要なもの」が「すべてわが国にそなわっている」と太鼓判をおし、「社会制度」、「天然資源」、「技術」、「科学」、「熟練幹部要員」、「闘争で鍛えられた聡明な党」と並べたて（前出、一六九ページ）、さてそこで、「一九六〇年から一九八〇年まで」の二〇年間に、「社会的総生産物」は「約五倍」に、「工業生産物」は「六倍」に、「農業総生産高」は「三・五倍」に増大すると述べ、以下各項目について、たとえば「六倍」または「七倍」というように、景気のよい「計画数字」を続々と並べてみせるのである。(10)

(10) たとえば、「電力」について、かれは、

「わが国は、一九八〇年には、ソ連邦をのぞいた世界の他のすべての国ぐにの現在の総発電量の約一倍半の電力を生産するようになるであろう。……

……人口一人当りの電力のキロワット時数でも、アメリカを追いこすはずである。

……運輸、農業、都市および農村住民の日常生活の大々的な電化が広くおこなわれるようになろう。……」（前出、一七三ペ

ージ）

と述べたて、さてそこで、つぎのような手放しの自讃の言葉をかかげている。

「同志諸君、なんという壮大な、真に心をうばう計画であろう！　ほんとうに、共産主義の太陽がわが祖国の上に昇ってくるのだ！」（前出、一七三ページ）。

物欲第一主義、自国共産主義社会建設最優先主義が骨の髄までしみこんだこの修正主義的「頭領」は、自分自身の手で紙の上に画いてみせた「共産主義の見取図」の「すばらしさ」に随喜の涙を流さんばかりである。「なんという壮大な、真に心をうばう計画！」と、「頭領」は感きわまって叫ぶ。これにこたえて、忠実な「乾分」どもは、同じく献身的感激をこめて叫びかえす、――「壮大な共産主義建設の綱領！」（袴田里見氏）、「人類の夢を実現する新綱領！」（榊利夫氏）、「共産主義の壮大な展望！」（榊利夫氏）と。

四

ところで、景気のいい「計画数字」は、さしあたりわれわれにとってさして理論的関心をもちうるものではない。それは、いわば「画にかいた餅」に類するものであり、しかも、ソヴェト国民だけがたらふく食べることができて、数億の被抑圧人民大衆にとってはまったく無縁の「餅」である。当面、理論的にみて重要な意義をもっているのは、「資本主義社会の母斑」を「一掃」すること、とくに「階級的差異」、「都市と農村との差異」および「知能労働と肉体労働との差異」を「一掃」する、という問題である。フルシチョフは、さきにみたように、一方では、「共産主義がそれ自身の基礎にたって発展する」とか、「搾取者階級がおらず、労働者、農民、インテリゲンチャという社会の全成員が、共産主義の勝利に切実な関心をもち、そのために意識的に努力している条件のもと」とか述べながら、他方では、「まだ存在している階級間の差異の遺物」とか「諸階級」とかいう言葉をならべ、さらにまた他の個所では、「社会主義的生産関係をしだい

に共産主義的生産関係につくりかえ、階級のない社会をつくりだし、都市と農村とのあいだ、ついで知能労働と肉体労働のあいだの本質的な差異をなくす」などという主張を展開しているのである。

それゆえ、もっとも中心的な問題は、当然、「社会主義的生産関係と共産主義的生産関係とのちがいは、どういう点にあるのか？」、「社会主義的生産関係とは、どういう生産関係であるのか、そして、そこに階級的差異があるというのは、どういうことか？」ということでなければならない。これらの点が明確に説明されないかぎり、「社会主義社会から共産主義社会への移行」のもっとも肝腎な「基本内容」は、うやむやにならざるをえない。では、自称「レーニンの直接的後継者」は、これらの問題について、どのような説明をあたえているか？

フルシチョフは、その「報告」の「Ⅲ　社会主義経済から共産主義経済へ」の「2　農業と農村における社会関係の発展」の中で、まず、

「わが党は、共産主義建設の現在の段階では、つぎのことが**農業の部面における主要な課題**だと考えている。

――国民のための良質の食料品と工業用原料とを、ありあまるほどつくりだすこと、

――農業の生産力の力強い高揚をもとにして、共産主義的社会関係へのソヴェト農村の漸次的移行を確保し、都市と農村との差異を基本的になくすこと、これである」（前出、一七八ページ、ゴシック体―フルシチョフ）

と述べて、二〇年後の農産物増大のめざましい「計画数字」と並べたて、つぎのように説明する。

「共産主義への道を前進するわが国の農村の特徴は、なんであろうか？　社会主義農業は、技術装備と生産組織の点で工業の水準に近づいていく。これは、労働の性格に大きな質的変化が起ることを意味する。コルホーズ員やソフホーズ労働者の文化的＝技術的水準が高まり、農業のすべての部門が近代的な機械設備で装備されていくにつれて、農業労働は工業労働の一種に変っていく」（前出、一九三ページ）。

みられるように、農業労働は「近代的な機械設備で装備されていくことによって、工業労働の一種に変っていく」というの

である。フルシチョフは、ここで「生産組織の点で工業の水準に近づいていく」と述べているが、コルホーズは何年経っても依然としてコルホーズのままであるとされているのだから、この「生産組織」というのは、「技術的な意味での生産組織」にすぎず、したがって「技術装備に見合った人員組織」というだけのことである。だが、「近代的な機械設備で装備されている」からといって、いったい、どこに「労働の性格に大きな変化が起る」ことがあろうか？　もしこれまで手工的道具と手労働が主であったのであれば、「近代的な機械設備による装備」はうたがいもなく大きな「質的変化」を意味する。ソヴェト農業はとっくの昔から「機械設備による装備」をはじめ、むしろ「機械設備による装備」を「テコ」としてコルホーズの成立、発展がおこなわれたといわなければならない。もし「近代的な機械設備による装備」によって「農業労働に大きな質的変化が生じ、工業労働の一種に変っていく」というのであれば、たとえば、北米合衆国の農村でも、かなりの部分がすでに「大きな質的変化」を生みだしていなければならない。だが、肝腎なのは、社会的な「生産組織」、生産関係である。コルホーズは、まだ「集団的所有」に基礎をおいており、この「集団的所有」は、「私的所有」から「社会的所有」へのひとつの過渡的形態、いわば「集団化という枠をはめられた括孤つき」の「私的所有」にほかならない。それは、まだ「社会的所有」ではなく、それが「社会的所有」に移行するためには、なおそこに「命がけの飛躍」が必要不可欠であり、これによって、その本質的構成要素となっている「私的所有の名ごり」を完全に止揚しなければならない。とりわけ、自留地などを相当程度保障されていて「私的利益」の追及が可能となっているところでは、「商品・貨幣」の存在とあいまって「資本主義への道」を歩む可能性は大きく残されているといわなければならない。このことは、本稿でさきに引用した事例などによっても明瞭に示されているところである。[11] いったい、このような過渡的な「集団的所有」、いわば「集団化の枠をはめられた私的所有の残存形態」を「基本」とする

コルホーズをば、どのようにして「社会的所有」におしすすめようというのか？

(11)　本稿の「三」(二〇―二一ページ)を参照。コルホーズのみならず、ソフホーズにおいてさえ、現在の過渡的な生産諸関係、つまり「私的所有の名ごり」に規定されて、農民および党員の思想が著しい程度に「私的所有」者的観念にとらわれざるをえないということは、同じ「2」の中の、フルシチョフ自身のつぎの説明からもはっきりとうかがわれる。

「……しかし、問題はそれだけではない。成り行きまかせのやり方と手を切らなければならない。この成り行きまかせのやり方は、まだ多くの面で、農業の発展にブレーキをかけている。……ここでは、まだ古いやり方がはばをきかせている。それは生産に必要なだけの人数が農業で働くというのではなく、コルホーズにいるだけの人数が農業に従っていたという状態である」(前出、一九二ページ、傍点―山本)。

なお、フルシチョフが「二〇年後共産主義社会建設」という「壮大な大ぶろしき」をひろげた一九六一年からまる六年たったのちにおいても、「私的所有の名ごり」、「私的利益の追及」、「物質的刺戟への執着」がどんなにコルホーズ農民の心を完全に支配しているかということを示すものとして、朝日新聞特派員の『シベリア・ドライブ』と題する特集記事の中でのイルクーツクについての叙述から一節を引いておこう。

「……うれしいことに、トマトとキャベツのサラダが食堂にあった。イルクーツクまでは、きざんだ堅いネギのほか、野菜や果物にはほとんどお目にかかっていない。……

少し買いだめしようと、国営商店を歩いてみたが売っていない。中心街から少しはずれたところにあるコルホーズ自由市場をのぞいてみたら、ここにあった。コルホーズ自由市場というのは、コルホーズの農民が副業の自分の畑でとれた作物を売りにくるところで、好きな値段で売ることができる。……

一番よさそうなのを選んで、トマトとリンゴを一キロづつ買ったら、なんとトマトは千百円、リンゴは千円である。赤ちゃんのこぶし大のが、一つ百円から百五十円につく。

売っている農民をみると、ウズベク地方の帽子をかぶり、色が黒く、ひげなどはやして、どうもシベリアっ子とは様子が違う。聞いてみると、中央アジアのタシケントや、カスピ海のほとりのバクーから来ているという。

どちらも、ソ連では有名な果物の産地。飛行機や汽車に五百キロ、一トンと積みこみ、ひともうけをたくらんでやってくる

のだ。なかにはカムチャッカのあたりまで遠征するのもいるという。

タシケントからでも飛行機代は往復六万五千円、これが売値に加わるのだから、高くなるのは当然だ。それでも果物にうえたシベリアの主婦たちは買っている。……

ソ連にもこんなに商魂たくましい農民がいるのはおもしろかったが、夏も半ばすぎたというのに、こんな高いものを買わされるシベリアの主婦には、同情した。シベリアの高賃銀にはどこにいっても驚かされたものだが、物価がこう高くては、家計のやりくりも楽ではないであろう」（一九六七年八月二十五日付「朝日新聞」、傍点―山本）。

飛行機代六万五千円也を払って果物を五百キロ、一トンとシベリア、カムチャッカまで運搬して自由市場でひともうけもふたもうけもふところにいれる農民！　これこそ、「旧社会の母斑」がいかに根強く、十年や二十年ではとうてい抜きがたいものであるかを示す、生きた証拠である。それはまた、まる六年前、「労働者、農民、インテリゲンチャという社会の全成員が、共産主義の勝利に切実な関心をもち、そのために意識的に努力している」などといった、フルシチョフのおしゃべりのだぼらぶりを的確に示すひとつの証拠でもある。コルホーズ農民にくらべて、インテリゲンチャにははるかにぬきがたく「旧社会の母斑」がしみこんでいることは、しばしば商業新聞紙上を賑わすゴシップ―たとえば、ヤンキーかぶれのセミ・ヌードのファッション・ショウとか、大学生たちのあいだでの熱狂的なツイスト流行など――によってもよく示されている。

フルシチョフは、「農業の発展は将来どういう道によってなされるのか、コルホーズの道か、ソフホーズの道か？」という「質問」をかかげ、これにたいして、おどろいたことに、「党は、農村における共産主義の建設が二つの社会主義的生産形態の双方を発展させ改善する道によってすすむという考え方をもとにしている」と答え、さらにつぎのように弁じたてる。

「一つの社会主義的経営形態をもう一つの社会主義的経営形態に対置してはならない。コルホーズもソフホーズも、技術・科学の達成を効果的に利用し、社会的生産を急速に拡大することのできる大規模な社会主義経営である。物質的可能性が等しく、生産の組織がすぐれており、有能な指導が与えられれば、どちらの形態もりっぱな結果をもたらしうるのである」（前出、一九五ページ）。

みられるように、コルホーズとソフホーズとの間の「生産関係」の「質的差異」は、どちらも同じ「社会主義的経営形態」であるという言葉によって消し去られ、両者はまったく「同じもの」であり、どちらも「労働の生産性」を高

めさえすれば、首尾よく「共産主義の建設」に通ずるものだとされているのである。「私的所有の名ごり」＝「集団化の枠をはめられた私的所有の残存形態」が発展することによって、「共産主義の建設」が生れてくる！　なんと、すばらしい「旧社会の母斑」であろうか。しかも、この「集団化の枠をはめられた私的所有の残存形態」そのものがそのままっすぐに「共産主義」に通ずるための、唯一最大の「テコ」とされているのは、まさに「私的所有」にみごとに対応するところの「物質的関心の原則」である！

「……この目的を達する上で、重要な役割をはたすのは、**物質的関心の原則**であろう。われわれは、今後とも、精神的刺戟と**物質的刺戟**を結合し、社会のためにより多くの農産物を生産する人を奨励し、すぐれた労働模範によって高い規律と共産主義的自覚を育てていかなければならない」（前出、一九六ページ、ゴシック体―山本）。

この「物質的関心の原則」という言葉に、どうかとくと注意していただきたい。それは、いうまでもなく、「その働き手がよく働けば働くほど、かれ個人の物質的利益がそれだけ多くなる」という「原則」である。それは、徹頭徹尾、「私的所有」に基盤をおく資本主義社会の私的利益追及の「名ごり」であり、まさに、レーニンのいう「ブルジョア的権利の名ごり」以外の何物でもない。だが、いったい、共産主義とはなんであるか？　それは、「労働を義務と考えたり」、いわんや「自分の利益を第一において労働する」などという「習慣」を完全に一掃して、働き手自身の「自由で自覚した規律」に支えられ、かれらから「遠い人々」のために、「全体としての全社会」のために、かれら自身の「健康と生命」とを惜しむことなく、献身的に働くとき・ところに、ただそのとき・そのところにだけ、実現されるものである。まさにレーニンが明示しているように、「物質的関心の原則」などという「ブルジョア的権利の名ごり」、「小ブルジョア的利己心」にたいしての「この勝利が固められたとき、そしてそのときにだけ、新しい社会的規律、社会主義的な規律がつくりだされるであろうし、そのときに、そしてそのときにだけ、資本主義への復帰は不

可能となり、共産主義は真に不敗のものとなるであろう」（全集第四版、第二九巻、三七九ページ、傍点―レーニン）。

ところが、あきれたことに、レーニンの「直接的後継者」をもって自任するフルシチョフは、「ブルジョア的権利の名ごり」、「小ブルジョア的利己心」にたいして適切なたたかいをすすめるどころか、あべこべに、もっぱらこれらに依存し、「物質的関心の原則」を唯一の「テコ」として、共産主義建設をなしとげようと説いてまわっているのである。この、「小ブルジョア的利己心」を熱心に鼓吹してまわる「教祖」は、こう説教する。

「党は、つぎのことから出発している。すなわち、**向う二〇年間ひきつづき労働に応じた支払い**は、物質的・文化的欲求をみたすための主な源となっているということである。**労働に応じた支払いの原則**は、生産性向上の力強い手段であり、勤労者の文化＝技術水準の向上をはげまし、これによって、知能労働と肉体労働との間の本質的差異を徐々に克服していくのを助ける。また**労働に応じた支払いの原則**は、国民の実質所得の増大の重要な源泉であり、社会的富の増大につれて、高い賃銀水準と低い賃銀水準とのひらきを徐々に縮めていくことを可能にする。われわれは、労働にたいする精神的刺戟を極力発展させ、強化していくとともに、**共産主義社会建設の重要なテコとしての、労働に応じた分配原則を一貫して、徹底的に利用しなければならない**」（前出、一九九ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

「**物質的刺戟**と精神的刺戟の正しい結合―これがわれわれの方針であり、共産主義建設の全期間を通じてのわれわれの進路である。社会主義の段階にあるかぎり、**労働に応じた分配**や、商品＝貨幣関係や、価格、利潤、財務、信用のようなカテゴリーなしにはすまされない。これらの経済的用具は、わが国では、社会主義的内容をもち、共産主義の建設に役立っている」（前出、二〇六ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

これらの説明は、フルシチョフが抱いている「共産主義建設」の「基本線」を浮き彫り的に示しているものである。その「基本線」のあらましは、およそつぎのようなものである。

まず第一に、そして最後まで徹底的に堅持し強化していかなければならないのは、「ブルジョア的権利の名ごり」・「旧社会の母斑」である「物質的関心の原則」、「小ブルジョア的利己心」の活用である。この「物質的関心の原則」、「小ブ

ルジョア的利己心」の活用によって、労働者、農民はとどまるところなく「労働の生産性」を高め、「空前の強大な生産力をつくりだし」、「物質的財貨の生産を発展させ」る。「物質的刺戟」によって奮いたたせられた労働者、農民の生産増大により、「設備の機械化」が強力におしすすめられ、「世界最高の労働生産性を確保する」ことができるようになり、これによって、「農民の労働の性格と農民自身の性格も変り」、「労働者と農民との間の階級的差異、都市と農村との間の本質的差異」もしだいになくなる。また、同じく「物質的刺戟」によって奮起した「肉体労働者」は、その「文化的・技術的水準を高め」るようになり、「肉体労働と知能労働の間の本質的差異は大体においてなくなる」ようになる。

このようにして、唯一最大の「テコ」たる「物質的刺戟」によって一人残らず奮いたたせられた労働者、農民、インテリゲンチャは、「最高の労働生産性」を獲得し、「都市と農村との、労働者と農民との、知能労働と肉体労働との本質的差異」は首尾よく一掃され、完全に「無階級の社会」がつくりだされるとともに、「物資がありあまるほどあふれるようになり」、ここにめでたく「人類の夢」は実現されることになる。「物質的刺戟の原則」「小ブルジョア的利己心」の活用こそは、まさにレーニンの「直接的後継者」の発見した世紀的万能薬である。「物資があふれでるほどになり、ほとんどの消費物資がみなタダでもらえる」ようになるというのに、「小ブルジョア的利己心」を心ゆくまで満たしてくれる「極楽」＝「人類の夢」が自分たちの生きているうちに眼の前に生れてくるというのに、誰か奮いたたないものがあろうか！

フルシチョフがこうした「心情」を十二分に察知して、さらに「物質的刺戟の原則」、「小ブルジョア的利己心」の活用を「神聖不可侵」・「確固不動」のものたらしめるべく、その『報告』の最後でいちだんと声を励まして、つぎのようにぶっているのは、まことにさもあるべきことなのである。

「共産主義の勝利は、つねにレーニン主義党の神聖な終局目標であった。いま共産主義というこの夢は、現実となっている。同

志諸君、われわれの子孫だけでなく、**われわれすべてが、ソヴェト国民のわれわれの世代が共産主義の下で暮すこととなるだろう！** この意識は、ソヴェト国民の一人ひとりをはげまして、未曽有の熱情をこめて生活し、仕事をしようという希望を生んでいる」（前出、二五七ページ、ゴシック体—山本）。

ただ、この、レーニンの「直接的後継者」の期待に反して、右の「神聖不可侵」の「最高の原理」＝「物質的刺戟の原則」は、あまりにも心の奥深くソヴェト勤労者の魂にふれたためであろうか、種々様々の「ソ連の資本家」、「新しい企業家」、「投機商人」、「搾取者」をつぎつぎに生みだし、「飛行機代六万五千円をかけてシベリアの自由市場でひともうけしようとたくらむ」ようなコルホーズ勤労農民をつくりだし、おまけに「不道徳な行為をし」たり「社会主義的共同生活の規準と規制を乱す」「労組員、青共員、党員」が跡をたたないという「結果」を生みだしているのであるが、この事実は、むしろ右の世紀的万能薬の本質の端的なあらわれにほかならない。どんな万能薬でも、容態の推移に応じて適切にとりかえなければ、かえって危害をおよぼすことになるのは、理の当然である。(12)

(12) 「物質的刺戟の原則」、「小ブルジョア的利己心」の活用という「万能薬」は、資本主義から社会主義にいたる過渡期において、それも、その過渡期のうちの前半の時期についてのみ、しかも一定の限度内で、社会的「効果」をもちうるにすぎない。その後半においては、右の「原則」は、できるかぎり早く「社会主義的規律」によっておきかえられなければならないのであって、その段階においてもなお右の「原則」をば「万能薬」として固守するならば、必然的に「資本主義の道」を歩む傾向を生みだし、「生産力の発展」は頭打状態におちいることになる。

ところが、この「物質的刺戟の原則」の「万能ぶり」に眼のくらんだ「レーニンの直接的後継者」は、図に乗って、ソ連邦では「無階級社会の建設」が早くも着々と進行し、「プロレタリアートの独裁の国家」はすでに不用なものとなり、いまでは「独裁のいらない全人民的国家」が成立しているとまで、主張している（前出、二〇九—二一一ページ）。そして、「わが国における共産主義の建設は、社会主義共同体全体に共産主義をきずきあげる事業の構成部分である」（前出、二二五ページ）という臆面もない「口実」で「自国共産主義建設最優先主義」を「合理化」しているこの「後継者」は、旧植民地、「後進国」にたいしては、「非資本主義的発展の道に解決を求めなければならない」（前出、二三一ページ、傍点—山本）と主張し、そのた

めには「民族民主国家の形態」をとらなければならないと強調している（前出、二三一ページ、傍点—山本）。この、悪名高い「非資本主義的発展の道」や「民族民主国家」の主張者は、かの反革命的殺戮者ナスチオン一味に数億ドルの「武器援助」をしたり、インドに多額の侵略用兵器を供与したりすることによって、真にどういう意味での「国際主義者」であるかを、あまねく実証したものである！

さて、フルシチョフは、その『報告』の「Ⅵ　綱領草案討議の総括」の「2　綱領草案の国際的反響」の中で、この「綱領草案」が「真に世界的な意義をもつ文献としての性格をおび、すでに世界の政治情勢に絶大な影響をあたえている」（前出、二四四ページ）と述べ、

「マルクス・レーニン主義の兄弟党、世界各国の数千万の共産主義者が綱領草案に高い評価（?!）を下したことにたいし、われわれソヴェトの共産主義者は、もちろん、深い満足（!!）をおぼえている。他国の共産主義者は、自分たちはソ連邦共産党綱領草案のなかから実践的な活動と闘争へのはげまし（?!）を汲みとっている、ソ連邦共産党の成功（?!）は、われわれの勢力—全世界の自由（?!）、平和（?!）、社会主義の勢力を何倍にもしている（?!）と言っているが、われわれはこのことに、国際主義者として（?!）幸福を感じている（!!）」（前出、二四四ページ、（?!）および（!!）—山本）

と、例によって例のごとき、「ソ連共産主義社会建設最優先主義」の立場からの手放しの自画自讃を並べたて、得意然として、

「すべての兄弟諸党、世界のすべての共産主義者が、われわれの計画、われわれの目標を支持してくれたことにたいして、第二二回大会の代議員を代表し、全党員とソヴェト全国民を代表して、ここに心からの感謝の念をのべさせていただきたい」（前出、二四四ページ、傍点—山本）

という、ブルジョア政治屋顔負けの「謝辞」を並べたてたものである。ここに「すべての兄弟諸党、世界のすべての共産主義者が」と言っているのは、もちろん、自称「レーニン後継者」のはったりであって、真のレーニン的共産党、

真の共産主義者たちは、この「物質的刺戟の原則」・「小ブルジョア的利己心」の活用を説教してやまない教祖の反レーニン的正体をば、とっくの昔から看破していたのである。

ところで、この反レーニン的教祖の指導のもとに作製された臆面もない似而非共産主義的「綱領草案」にたいして、「高い評価を下し」、そこから「実践的な活動と闘争へのはげましを汲みとり」、これを「支持」することにおいて、もっともきわだった献身と忠誠を表明した「兄弟党」や「共産主義者」のなかで、名実ともに傑出していたのは、誰あろう、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「指導者」たち、――野坂参三氏、袴田里見氏、そしてわが**榊利夫氏**らの面々であったのである！

五

われわれはまず、公式文書からみていくことにしよう。「日本共産党中央委員会理論政治誌」と銘うたれた雑誌「前衛」の第一九一号（一九六一年十二月号）の巻頭には、『ソ連邦共産党第二二回大会への日本共産党中央委員会の祝辞』がかかげられているが、その題目の横には、「ソ連邦共産党第二二回大会に出席した日本共産党代表団長野坂参三中央委員会議長は一〇月二三日日本共産党を代表してあいさつをおこなった」と記されている。この「祝辞」が、「フルシチョフ同志を先頭とする反レーニン的修正主義集団」への真心こめた献身的讃辞であることは、これを一読すればすぐ思い知られるところであるが、そのうちのきかせどころを、原文そのまま、つぎに引用してみよう。

「わたくしは二十三年まえソ連共産党第十八回大会に出席しました。その当時のソ連と今日のソ連、その当時の大会と今日の大会をくらべますとき、まったく隔世の感があります。当時ソ連では、社会主義の建設が中心任務であって、共産主義の建設はまだ当

面の問題にはなっていませんでした。しかし今回の大会は、それを具体的な日程にのぼせているのであります。（拍手）マルクス・エンゲルスが百年以上まえに天才的に展望した共産主義社会をこの地上に現実に実現することをめざす歴史的な綱領を決定しようとしているのであります。ソ連における共産主義建設の勝利をめざすこの綱領は、人類がこれまで経験したことのない真の自由と幸福をソビエト人民に保障するものであるとともに、全世界の勤労人民に大きなはげましをあたえるものであります。（拍手）

われわれは日本の進歩的勤労人民とともに、この共産主義社会の実現をめざすソ連の共産主義者と全人民のたたかいに心からの敬意を表するとともに、これをつよく支持するものであります。（拍手）そしてフルシチョフ同志を先頭とする中央委員会の周囲にかたく団結したソ連共産党の全党員、全ソビエト人民の不屈の努力によってこの計画が必ず実現するであろうことを確信するものであります。（長くつづく拍手）今日では、各国人民の敵もまたソ連を先頭とする社会主義陣営が不断に発展し、強化している事実を認めないわけにはいかなくなっております。（拍手）」（前出、二―三ページ、傍点―山本）。

みられるように、野坂氏ら「日共指導層」の眼からみれば、「スターリンが主宰し、フルシチョフが政治局員、中央委員の一人としてスターリンに献身的忠誠を表明していた第十八回大会は、まだ社会主義の建設が中心任務となっているもの」で、とうてい「フルシチョフ同志の主宰する、共産主義の建設が中心任務となっている第二二回大会」とはくらべものにならない、「まったく隔世の感があ」るところなのである。「レーニンの後継者、マルクス・レーニン主義者スターリンが主宰し、マルクス・レーニン主義の基本原則の支配していた第十八回大会」は、野坂氏ら「日共指導層」の連中にとっては、「レーニンの似而非後継者、反レーニン的修正主義者フルシチョフが主宰し、マルクス・レーニン主義の改ざん・裏切り・修正の『体系化』が展開された第二二回大会」の足許にもおよばないのである！

「物欲第一主義、『物質的刺戟の原則』第一の立場からひたすら物資がありあまるほどあふれでることをめざした反レーニン主義的綱領」は、野坂氏ら「日共指導層」の眼からみれば、「共産主義社会をこの地上に現実に実現することをめざす歴史的な綱領」であり、「ソ連における共産主義の勝利をめざす綱領」として渇仰の的となる！

「神聖不可侵の『物質的刺戟の原則』の支配のおかげで『ソ連の資本家』、『新しい企業家』、『商魂たくましい富農』、『投機商人』、『搾取者』らが真の自由と幸福を保障されている」という事実は、野坂氏ら「日共指導層」からみれば、「人類がこれまで経験したことのない真の自由と幸福をソビエト人民に保障している」として賞めたたえられる！

「自国共産主義社会建設最優先主義の立場から、強力による革命運動をむりやりおさえつけ、『非資本主義的発展の道』や『民族民主国家』やの似而非革命論をぶって、反革命勢力に莫大な武器を供与し、数万、数十万の革命的人民大衆を血の海の中に溺れさせている当の『国際主義者』」の「反レーニン的綱領」が、なんと、野坂氏ら「日共指導層」の眼には、「全世界の勤労人民に大きなはげましをあたえるものであります」のである！

そして忠実無比な弟子は、教祖の大ぶろしきにも、献身的な「保障」をあたえなければならない。——曰く、「この計画が必ず実現するであろうことを確信するものであります」！

野坂氏らは、さらに一歩をすすめて、「日共指導層」がいかに先駆的に、終始一貫、「フルシチョフ同志を先頭とするソ連共産党指導部」の方針に忠実にそってきているかということを、この世紀的な大会の席上で公式に声明しておくことがこのさいもっとも適切であると考えて、この大会に先立つ三月まえに早くも日本共産党第八回大会が、かの第二〇回大会の『フルシチョフ報告』の中の精髄部分＝棚ボタ式平和革命論——をもって「日共綱領」の中核に据えたことを、得々として披露しているのである。

「さる七月におこなわれたわが党の第八回大会は、アメリカ帝国主義と日本独占資本の二つの敵に反対する新しい人民の民主主義革命を遂行し、それをひきつづいて社会主義革命に発展させることを基本路線とする新しい綱領を満場一致で採択し、それを中心に党の団結をかためております。（拍手）」（前出、四ページ、傍点—山本）。

みられるように、この「祝辞」ほど、反レーニン的裏切者、フルシチョフの修正主義の「体系化」が「明確化」さ

れた第二二回大会『報告』にたいする、「日共指導層」と献身的な追随と完璧な盲従を的確に示しているものはない。ところが、なんと、五年後には、「日共指導層はこの第二二回大会よりずっと以前から『先駆的』にフルシチョフ修正主義と献身的にたたかってきたのだ」という、真っ赤なウソを平気でつく「指導者」があらわれているのである。それは、誰あろう、第二二回大会に出席してフルシチョフに懸命の拍手をおくった榊利夫氏そのひとなのである！

六

袴田里見氏は、同じ「前衛」（第一九一号）誌上に、『壮大な共産主義建設の綱領』という題名の論文を発表している。この題名を見ただけで、この論文の中味が、さきの「祝辞」と全く同様、「新綱領」への献身的讃辞をつらねたものであることはすぐわかるが、なお念のため、その中から抜粋してみることにしよう。

袴田氏は、その論文の冒頭で、まず、

「全世界の人びとの耳目は、今度、モスクワで開催されたソ連邦共産党第二二回大会に集中されている。この大会の中心的な議題は、いうまでもなく、共産主義社会建設の壮大な計画を内容とする綱領の決定である。」（前出、五ページ）

と述べ、フルシチョフのかかげた「計画数字」を―驚嘆と絶讃の言葉をそえて―つぎのように忠実に並べたてる。

「全世界の人民が驚嘆しているのは、新綱領に盛られた共産主義建設二〇ヵ年計画の内容なのである。

この建設計画がいかに資本主義国の人びとの想像を絶するものであるかは、つぎのいくつかの数字を見ただけでわかる。たとえば、二〇年間に投下される資金が二兆ルーブルである。一ルーブルが九〇〇円であるから、一八〇〇兆円ということになる。これをかりに二〇年間平均に分ければ、一ヵ年の投資額が九〇兆円となって、日本政府の一年間の総予算の四五倍である。……

二〇年後のソ連の発電量が、二兆七〇〇〇億キロワット時生産される。これは、今日の全世界の総発電量の一倍半にあたる。……

ソ連は今後一〇年後に、アメリカの現在の生産を上まわり、二〇年後には、ソ連の生産は今日の六倍になり、アメリカをはるか

後方に追い抜いてしまうことになっている。またソ連の農業は、二〇年後には今日の三倍半以上になる。

フルシチョフ同志が報告で述べているように、今後二〇年間におけるあらゆる分野の生産は数倍になり、それは基礎建設だけではなく、消費品の生産も五倍になることが計画されている。したがって二〇年後のソ連では、人民の衣食住に必要な品物は、ありあまるほど生産されるわけだ。たんに生活に必要な品物がまにあうという状態では共産主義社会ということはできない。共産主義社会では、あらゆる物資がありあまるほど生産されるのでなければならない」（前出、五―六ページ）。

このようにして、くりかえし並べたてられた「計画数字」にたいして、袴田氏は、さらに―忠実なたいこもちよろしく―達成・実現の「保証」を与える。

「……社会主義国には景気不景気の循環はありえない。天候に影響される農業以外は、すべてが計画どおりこんにちまで達成されてきたし、将来もこのことにかわりはない。だから（?!）ソ連共産党がこのたび発表した二〇ヵ年計画の完成をうたがう余地はぜんぜんない」（前出、七ページ、傍点および（?!）―山本）。

「あらゆる物資がありあまるほど、あふれでる」ことの魅力もさることながら、小ブル的俗物にとってやはり最大の魅力は、たくさんのものが「タダ」になるということでなければならぬ。それゆえ、忠実な追随者＝弟子は、とくにここに力点をおいて強調せずにはおられない。

「ソ連共産党の二〇ヵ年計画が完成されたあかつきには、ソ連では住宅、光熱、公共の交通機関、鉄道、電車、バス、教育、保健、昼食、その他かなりなものが**無料になる**。資本主義日本に住むわれわれは収入の大部分を以上の支出にあてているのだから、これらがただになるというのを聞いただけでうらやましいかぎりである。資本主義社会ではすぐ**ただのもの**はろくなものではないと考えがちであるが、その筆法で想像すべきでなく、立派なものが**ただになる**のである。そしてソ連ではその後の発展につれてすべてのものが**ただになる**ということは、社会から貨幣がなくなることを意味する。すべての人が必要なものを必要なだけ受けとることができるのである」（前出、七ページ、ゴシック体および傍点―山本）。

資本主義国で「ただになる」ことと社会主義国で「ただになる」ことの間の根本的差異が全然わからず、俗物的

筆法で両者を全く同じものと早や合点し、「うらやましいかぎり」という卒直な俗物的嘆声を発して、教祖・フルシチョフ同志のために、日本国内の俗物たちの支持票をすこしでもふやそうと懸命に弁じたてている姿は、まことに涙ぐましいばかりである。

洋の東西を問わず、献身的な弟子たるものは、教祖の教えをさらにいっそう輪をかけて誇大宣伝することをその神聖な義務と心得ていなければならないのであって、この「法則」は、わが袴田氏においてもみごとに妥当する。以下、問題別に、簡単にその宣伝ぶりを紹介しよう。

(1)　国家の問題について

「ソ連では資本家地主制度が撤廃されてから四四年になる。したがって（?!）ソ連国内には敵対階級がなくなってから長年たっている。わずかに（?!）階級的差別があるとすれば、労働者階級と農民および知識人があるだけである。しかもソ連のコルホーズ農民は社会主義的に（?!）改造されてきており、近い将来に二〇カ年計画のなかで労働者と農民のあいだにのこっているわずかの階級的差異ののこりかす（?!）さえもなくなってしまう。またすべてのソ連人民は、高度な教育を受け、そのうえ精神労働と肉体労働との差がなくなる（?!）ことによって、労働者と知識人の相違もなくなってしまう。この変化の過程で（?!）ソ連における国家ののこりかす（?!）もなくなってしまう」（前出、八ページ、傍点および（?!）―山本）。

ごらんのように、一九八〇年ではなく、まさに一九六一年現在において、ソ連の「労働者と農民および知識人」のあいだには「わずかの階級的差異ののこりかす」しかない、もはや「国家ののこりかす」しかないと、袴田氏は力説している。つまり、「労働者と農民のあいだの明確な階級的差異の現存」という教祖の御指示は、忠実なたいこもちの手にかかると、ほんの「わずかののこりかす」に化けてしまい、現存するソ連の強大な国家権力機構もたちまちのうちに「国家ののこりかす」にしぼんでしまうのである！

(2)　帝国主義戦争防止の問題

「社会主義世界体制の力は帝国主義勢力の団結した（?!）力よりもはるかに強大になっている……。それにもかかわらず帝国主義は、世界中のあらゆる可能な場所で国際緊張を激化させ戦争をくわだてているのである。このような帝国主義者の攻撃にそなえて、ソ連その他の社会主義諸国は、かれら以上の強大な武力（?!）を維持しなければならない。帝国主義者をして戦争に訴えることを断念させる（?!）ためである。……第二次世界大戦におけるアメリカの戦死者は、たった三〇数万（?!）にすぎなかったではないか。このように痛い目にあったことのない（?!）アメリカ帝国主義者にたいしては『君らが戦争をふっかけるなら資本主義もろとも君ら自身の破滅がさけられないのだ』ということを実物をもって（?!）教えてやる必要がある。これは五〇メガトン、一〇〇メガトンの核兵器であり、それを地球上のどんな地点にでも正確に打ち込めるロケット兵器なのである。ソ連がこのような兵器をもっているのは、今後世界のいかなる地点でも（?!）帝国主義者に戦争を起こさせない（?!）ためである」（前出、九―一〇ページ、傍点および（?!）―山本）。

アメリカ帝国主義者が終始一貫圧倒的優勢な核兵力を保有し、その圧倒的優位の前に「小ブルジョア的利己心」の権化である教祖が尻込みをしているという客観的事実は、忠実なたいこもちの手にかかると、たちまち、ソ連が「かれら以上の強大な武力を維持し、兵器をもっている」という「ありもしない事実」に化けてしまい、また、アメリカ帝国主義者とその手先きどもが南半球のいたるところで数千万、数億の勤労人民大衆を搾取・収奪・殺戮するために血腥い戦争をありとあらゆる方法・形態で強行しているという厳然たる事実は、「世界のいかなる地点でも帝国主義者に戦争を起こさせない」などという、盲従的だぼらでもみ消されてしまうのである！

(3) 「新綱領」への献身的讃辞

「これこそ**人間社会の理想郷**ではないか。……このような人類の幸福な社会をきずく思想は、もはやマルクス・レーニンの共産主義以外にありえないではないか」（前出、九ページ、ゴシック体および傍点―山本）。

マルクス・レーニン主義のまぎれもない世紀的な改ざん・裏切りが、忠実なたいこもちの手にかかると、正真正銘の

「マルクス・レーニンの共産主義」に化け、その世紀的改ざん者の政治屋的だぼらが、「人類の幸福な社会」、「人間社会の理想郷」を生みだすものとなる！

(4)　フルシチョフ路線の献身的な旗手としての名乗り

「われわれは、ソ連の人民がソ連共産党の指導のもとに一致団結して世界の平和を守りながら、共産主義建設の計画を完遂することを確信するとともに、他の社会主義諸国も、ソ連を中心とする兄弟的な団結によってきずきあげられている社会主義世界体制の共同体として、ソ連とともに、**ほとんど同時的に共産主義社会を建設するであろう**ことを確信するものである」（前出、一〇ページ、ゴシック体および傍点―山本）。

「物欲第一主義」と「ソ連共産主義社会建設最優先主義」の権化、ともいうべきフルシチョフは、第二〇回大会いらい、いたるところでくりかえし「まずソ連邦一国がいちはやく共産主義社会を建設し物資があふれでるほどになることが、世界革命運動の第一の先決問題である。これこそ、ソ連邦の神聖な国際的義務である。他の諸国の勤労人民はそれまで平和に、民主的に事を運ぶべし。ソ連共産主義社会の建設を眼のあたり見たところで他の諸国のいっさいの勤労人民は社会主義への道に立ちあがるべきである」と口を酸っぱくして説教しているのに、この献身的な弟子は、―狂信盲従のあまり、教祖の真意をはかりかねてか、あるいはまた、それでは数億の勤労人民がうまく教祖の「手に乗る」見込みがまだすくないと考えたものか、いずれにせよ―右の説教の段取りをすっかりとちってしまい、他の社会主義諸国も、ソ連総本山の教祖の指揮棒のもとに、ほとんど同時的に共産主義のゴールにとびこんでしまうと、述べたてているのである！

七

マルクス・レーニン主義の世紀的改ざん者、フルシチョフ同志に衷心から帰依している献身的な弟子たちのなか

で、野坂氏、袴田氏などよりはるか一段ときわだって傑出しているのは、いうまでもなく、「わが国のマルクス・レーニン主義者」のうちで「指導的理論家」をもって自任している**榊利夫**氏である。

榊氏は、親しく第二二回大会に出席してその深甚なる感激ぶりをいちはやく――「先駆的に」！――雑誌『ナウカの窓』（一九六一年十一月号）誌上に、『人類の夢を実現する新綱領――ソ連共産党第二二回大会から』という報告論文の形で発表している。この論文は、「**胸をふくらませて待ったもの**」というキャッチ・フレーズまがいの見出しをつけた最初の節からはじまって、以下「**社会主義の力と平和政策**」、「**空想―科学―現実**」、「**すごい工農業の発展テンポ**」、「**〝タダ〟の物がふえていく**」、「**将来は社会的自治に**」という、いずれおとらずめざましい見出しをつけた節からできあがっている。これらの見出しを見ただけで、榊氏のフルシチョフ教祖への傾倒ぶり、「新綱領」にたいする献身的支持ぶりは十分うかがえるが、なお、念のため、その中からきかせどころを抜粋してみよう。

(1) フルシチョフ同志個人の「偉大」さへの熱狂的な傾倒

「大会開催当時、フルシチョフ第一書記は中央委員会報告を六時間にわたっておこない、翌日もやはり同様の時間にわたって綱領草案報告をおこなった。そのエネルギーたるやまことにおどろくべきもので、現代の政治家のうち連続して**これだけの大報告**をやったひとは他にいないだろう」（前出、一ページ、ゴシック体および傍点―山本）。

「物欲第一主義」と「自国共産主義社会建設最優先主義」の立場にたって「物資がありあまるほどあふれでる」未来図をでっちあげるような、修正主義的大ぶろしきならば、どんな政治屋でも、延々六時間でも八時間でもしゃべりつづけるのは、わけないことである。献身的な弟子は、この教祖の政治屋的だぼらをば「これだけの大報告」といって賞めそやし、レーニン・スターリンなどよりも一段とすぐれていると、教祖を持ちあげることに大童（オオワラワ）である！

(2) フルシチョフ『第二二回大会報告』(=『現代修正主義の体系化・明確化』—榊氏)の大がかりな礼讃と宣伝

「ところで、新綱領の展望にふれるまえに最初の中央委員会総括報告のなかから、**われわれ共通の問題として**まず確認したいことがある。

フルシチョフ第一書記は、国際情勢の項で『社会発展における二つのコース、二つの傾向がますますはっきりしてきた。一つは社会進歩、平和と創造的活動の道であり、他のひとつは反動・圧制・戦争の道である』とのべるとともに『この報告でとりあげる期間に社会主義世界体制発展の、重要な段階が完了した』と指摘している。これは、いうまでもなく、社会主義世界体制が社会発展の決定的な要因になる一方、資本主義世界体制が国際舞台でいちじるしく力量をよわめ、ついに全面的危機の第三段階に入ったことを指している。周知のように、このまえの定期大会(第20回大会)からまだ五年しかたっていない。しかし、この五年間は世界史のうえからみればひとつの転換点であった。帝国主義の狼の論理を、もはや全世界におしつけることは不可能になった。

たとえば第20回大会後、帝国主義勢力はレバノンで、ハンガリーで、キューバで、ラオスで挑発的活動をおこなったが、**それを世界戦争にまで拡大することは、主体的にも客観的にも(?!)できなかった。**……

むろん、帝国主義者が危険な冒険にのりだす可能性(?!)は十分ある。そして現代においては、純然たる局地戦(?!)が存在する可能性(?!)もせばまり(?!)、重要地域(?!)での局地戦はただちに(?!)世界大戦に発展する可能性(?!)が増大している。しかし現代の軍事科学と社会主義平和勢力をまえにした戦争は、いったんはじめられたならば(?!)、うたがいもなく、帝国主義体制の最後となるだろう。……

とはいえ、社会主義体制は、戦争という手段で資本主義との勝負(?!)をつけようとはしていない。戦争による勝負(?!)は、**マルクス主義そのものからの背離**であるし、社会主義陣営の現実的課題(?!)も戦争の防止をもとめている。社会主義は、みずからの手で(?!)物質財を生産し、みずからの手で(?!)これを有効に消費することのできる社会である。他人の富の収奪を必要としない、(?!)。ここに社会主義が本質的に平和的である根拠がある。フルシチョフ報告はこうのべている。

『社会主義は資本主義との競争で勝利するだろう。この勝利は、戦争ではなくて、平和的な競争によってなしとげられるだろう。ことなった社会制度をもつ国々の平和共存ということがわれわれの立場であったし、今後もそうである。……』

ソ連および社会主義陣営の平和にたいする態度は、**このフルシチョフ報告によってあますところなく明らかにされている。**ソ連

の『平和共存』『戦争防止と平和擁護』の基本政策は、不動のものであって、こんごともつづけられていく。……

『胸をしめつけられるおもい』(?!)で核実験を再開したソ連が、いま確固たる自信と勇気をもって、平和と平和共存の政策をおしすすめていることをわれわれ（平和と民主をのぞむ者）は他人ごとにしてではなく、**じぶんたちのこととしてふかく理解しなければならないのではなかろうか。**

このようなソ連の平和政策へのかたい意思を念頭においたうえで、つぎに『ソ連共産党新綱領』の展望を具体的にみてみよう」（前出、一―三ページ、傍点、ゴシック体および(?!)―山本）。

「戦争には不正義の戦争と正義の戦争とがある」という周知のレーニンの命題をすっかり忘れて、「平和の道と反動・戦争の道との、二つの道しかない」という教祖の「戦争論」に熱をあげ、教祖の「おどし文句」どおりに「世界戦争」だけをひたすら心配して、「帝国主義の狼の論理をもはや世界におしつけることは不可能になった」とか、「純然たる局地戦が存在する可能性もせばまった」とか、「社会主義平和勢力をまえにした戦争は、帝国主義体制の最後となるだろう」とか述べたてて、ソ連邦共産主義社会建設最優先主義の立場からの「平和論」をふりまわし、ベトナム、コンゴその他南半球のいたるところで帝国主義者とその手先きどもが隠然公然、血腥い大衆殺戮や戦争を強行しつつある事実がその眼に全然うつらないという、このおどろくべき教祖一辺倒！　「平和的な競争で社会主義が資本主義に勝つ」などという、マルクス・レーニン主義の典型的な修正主義的改ざんを心底から信奉して、「強力と国内戦」によってのみ資本主義社会を社会主義社会に変革すべきであるというレーニンの明確な指示を裏切っている教祖のマルクス・レーニン主義歪曲と改ざんへの、この完全無欠な心酔ぶり！

(3)　「ソ連邦共産主義社会建設最優先」の「新綱領」の献身的礼讃

「『空想から科学への社会主義の発展』はマルクス主義の古典であるが、この時代に空想的社会主義者の遺産が、マルクスとエンゲルスによって科学的につくりかえられた。つまり『空想が科学に』なったのである。……その後レーニンはこの『科学を現実に

適用』し、ソ連において社会主義革命と建設が成功的にやりとげられた。ところがソ連共産党新綱領は、科学的共産主義を**現実のものに**かえる点にその核心がある。

……

よくいられているように、共産主義は『理念の体系』ではない。それはなによりもまずありあまるほどの物質財が生産され、消費される具体的な人間の社会である。したがってソ連では右の段階で《共産主義社会が基本的に》建設されることになる（基本的にであって、まだ完全な共産主義社会ではない）。**こうして人類がながい間もちつづけてきた壮大な夢が実現される**わけである。いうまでもなく、この壮大な夢を実現するものは、マルクス・レーニン主義者の党に指導されるソ連国民であって、改良主義者や修正主義者に指導された群衆ではない」（前出、三ページ、ゴシック体―榊氏、傍点―山本）。

「ありあまるほどの物質財が生産され、消費される社会」こそが「共産主義社会」なのだという、教祖の物欲第一主義の観点への、この美事な追随ぶり！　フルシチョフら「指導者」は、「真のマルクス・レーニン主義者」であって「改良主義者や修正主義者」とは全くちがうのだという、この断固たる主張！　そして、「真のマルクス・レーニン主義者」フルシチョフらの手でつくられた「新綱領」こそは、「科学的共産主義を**現実のもの**にかえる」べきもの、「**人類がながい間もちつづけてきた壮大な夢を実現する**」ものであるという、この献身的・絶対的な保証！

(4)　「フルシチョフ新綱領」が必ず予定よりも早く達成されるにちがいないという榊氏の太鼓判

「＝すごい工農業の発展テンポ＝

綱領のしめす内容をみてみると、こんご十年間に工業生産高は約2倍半になって、アメリカの現水準よりもはるかにたかくなる。20年後には少くとも6倍になる。……

農業生産は、十年間にほぼ2倍半にたかめ20年間に3倍半にすることになっている。主要農産物の住民一人あたりの生産高では、さいしょの十年間にアメリカを追いこす。……

こうした工農業の急速な発展については疑惑をなげかける者も少くない。……**しかし、ソ連の計画については歴史がもっともよい解説者である。第一次5カ年計画いらい、ソ連の国家計画が遂行されなかった例はひとつもない。**だからこそ、こんにちのソ連

のあの驚くべき生産水準と科学水準が達成されているのではないだろうか。……**ソ連の目標がかならず、しかも予定よりもはやく完遂されることはうたがいないだろう**」（前出、三―四ページ、ゴシック体―山本）。

なるほど、榊氏のおっしゃるとおり、「歴史がもっともよい解説者」である。「第一次五ヵ年計画いらい、ソ連の国家計画がすべて遂行されてきた」のは、ひとえに教組の排撃してやまないスターリンの指導下においてであった。だが、フルシチョフの「人類の夢を実現する新綱領」のもとでは、たとえば、小麦の生産高の推移はつぎのとおりである。この事実が示すところは、「新綱領」なるものが、実は「物欲第一主義・ソ連共産主義社会建設最優先主義」の立場にたつ「現代修正主義の巨頭」のひろげた大ぶろしきにすぎないものであり、その「計画」が「予定よりも早く完遂されることは疑いない」と太鼓判を押している榊氏は、実にこの巨頭＝教祖への献身的な追随者、盲従主義者の筆頭に位するものだ、ということである。なるほど、「歴史はもっともよい解説者」ではある！

（百万トン）

1960	64.3
1961	66.5
1962	70.8
1963	49.7
1964	74.4
1965	59.7

(5) 教祖の物欲第一主義の見地の懸命の宣伝

「＝〝タダ〟のものがふえていく＝

アメリカの数倍にのぼるこうした生産発展テンポを裏づけとして、国民所得はむこう十年間に約2倍に、20年間にほぼ5倍になる。国民一人あたりの実質所得は十年間に倍増し20年間に3倍半以上にふえる。……

同時に、勤労者からの所得税が一九六五年までに撤廃される。……

また新綱領は住宅建設にも拍車をかけ、後半の十年間には新婚者をふくむすべての家庭に文化住宅を保障し、しかもそれを**タダにしていく**とのべている。**よく笑いばなしに『タダより安いものはない』というが、実際にそうなるわけである。**

住宅だけではない。バス・電車・トロリーバス・地下鉄・水道・ガス・スチーム・床屋・風呂・クリーニングなども**タダ**になっていく。医療や保養はもちろん**無料**、養老年金はぜんぶに支給される。

全国の工場、官庁、農場では昼飯を**タダでサービス**する。学校（大学、高等）でも昼食を**サービス**する。小中学校では寄宿制を普及させ、朝食、昼食ともに**あたたかいのを無料でサービス**する。教科書類が**タダで**支給されることはもちろん、奨学金も大はばに増額されることになっている」（前出、四―五ページ、ゴシック体―山本）。

榊氏は、教祖をまねて「指導者」らしく、「タダよりも安いものはない」などという「笑いばなし」をもちだして、おおいに「物欲第一」の小ブル、俗物たちをばフルシチョフ式「共産主義」の側に獲得しようと懸命に宣伝これつとめているが、この榊氏の説明は、榊氏自身が、さきにみた袴田氏と全く同様に、資本主義社会の「無料」と社会主義社会の「無料」との間の根本的差異を全然知っていないという、基本的「品性」のあり方を如実に示しているものである。袴田氏といい榊氏といい、「わが国のマルクス・レンニン主義者」の中の「指導者」をもって自任する人々がこうしたマルクス経済学の初歩的知識の欠如していることを公けにひけらかしていることも、また、揃いも揃ってこのような無知・誤解にもとづいた全くのペテン論法で善意の大衆を釣ることになんらやましいものを感じていないことも、すべては、教祖へのひたすらなる忠誠と献身と盲従より出たことにすぎないのである！

(6) 「ソ連邦にはプロレタリアートの独裁の存在理由はなくなった」という教祖の「階級闘争終結」論、「国家変質」論の絶対的支持

「＝将来は社会的自治に＝

新綱領は、ソ連では搾取階級が根絶されたため、国内的にはプロレタリアート独裁の機能も変化していると指摘している。ソ連社会には抑圧の**階級的対象**はすでに存在しない。やがては国家そのものも、歴史的な使命をおえて消えてゆくだろう。『国家』は人類社会の『老兵』になっていく。だが、もちろんこのことは、いますぐ国家が消滅することを意味するものではない。

侵略的帝国主義が存在し、世界的規模で敵対階級が存在している以上、国家を急になくすことはできないし、国防の強化も必要である。また、国家をなくすには、それだけのながい準備の過程が国内的にも必要である。

この準備ないし移行の道程はすでにはじまっている。新綱領は、共産主義建設の道程で大衆組織の役割がますますたかまり、社会主義的民主主義がさらに発展し、国家権力機関はしだいに**社会的自治機関**にかわっていくと指摘している。……」（前出、五ページ、ゴシック体—榊氏、傍点—山本）。

(7) 「新綱領」による「人類の夢実現」への絶対的期待とその熱烈な宣伝

「こう展望をしめしながら、新綱領はさいごにはっきりと次のようにのべる。

『共産党はおごそかに宣言する——

ソビエトのいまの世代の人びとは、共産主義のもとで暮らすことになるだろう！』」（前出、五ページ）。

以上、簡単にその抜粋をみてきただけでも、榊利夫氏のフルシチョフ教祖への傾倒ぶりは並々ならぬものがあること、「フルシチョフ新綱領」の支持、賞讃、完全な追随、懸命な宣伝という点で、榊氏は、諸多の弟子のうちで群を抜いて傑出していることは、明白である。ところが、榊利夫氏は、こうした小論では、教祖にたいする献身的な信奉と忠誠を表明するのにきわめて不充分だとさとってか、この論文の最後に、つぎのような「ことわりがき」を附け加えたものである。

「新綱領について、22回党大会のすべてについて、まだまだ書きたいこと、書かねばならないことはたくさんある。しかし、紙数の制限があるためこれ以上かけない」（前出、五ページ、傍点—山本）。

教祖にたいする献身的信奉と忠誠とを表明して傑出した高弟としての実を示すためには、当然、「新綱領について、22回党大会のすべてについて」それがいかに画期的な意義をもっているかいうことをもっともっとよく書き、説明し、その世紀的意義を日本の人民大衆に宣明し徹底させることが、その課題となる。そして榊氏は、「紙数の制限」もなく、「最大の権威」をもって発表できるところを、てもなく見つけることができたものである。そこで、われわれは、「日

本共産党中央委員会理論政治誌」＝「前衛」第一九二号（一九六三年一月号）に載った榊氏の世紀的大論文、『共産主義の壮大な展望』をとりあげ、そこで氏が、右の課題をどのようにみごとに果し、世紀的教祖の輝かしい高弟としての実を完璧に示しているかということを、とくと拝見することにしよう。

（一九六三・八・一一）